昔語質屋庫

下

へ遠 13
717
2止

門へ遠13
號717
巻2

明治三六年十月十日
坪内雄蔵氏寄贈

昔語質屋庫下

第七　平將門衰龍の褻束の上

浩處ゑ上坐なる。闇さかたより坂東聲して。朕ハ是桓武天皇第三世。高見王の嫡子たる。高望王の孫衣なれバ。帝子と出て僅ゑ六世。昭穆未遠からぞ。開威さ。新皇帝將門の。衰龍の御衣なるに。匹夫下郎の樵木とる。遊女夜發の馬骨等が。朕と闇さて。もの〳〵しく。身のうへ語るハ不敬なり。いと嗚呼ゑ。と罵きバ。見臺先生冷笑ひ。風流の席にハ貴賤とヨかず。況て御邊が主と頼みし將門ハ。世と騒したる逆臣なれども。身後ゑその靈と宥られしハ。朝廷の恩澤にして。いとありがたき幸ひならずや。まづ問べき事こそあれ。不佞嘗。今昔物語神皇正統記等を閲して。粗將門の事と考るとい〻ども。その文省略にして。いまだ俗説を辨ずるに足らず。又大鏡朱雀の段ゑハ。まさかどがみだれ出來て。云々とのみ記されたり。されバ世に傳ふる將門が物ごたりハ。多くハむかし小説者の。意匠より出て。實事少し。まづその二ツ三ツを問ん。將門當時。關左八州を掠奪して。漫に僞號を唱ながら。平親王と稱せし事。野人の臆斷。見識卑し。これ疑ふべき一ツ。或ハいふ將門ゑ。七人陰武者あり或ハいふ。將門分身して。七人の形狀を顯せり。よりて何をか眞の將門なるを知ぞ。この故に。秀郷竊ゑ人をして。平親王に美女を贈らし。これを間者として。其眞僞を探らするに。蟀谷の動もの。眞の將門なりと。告しかバ。秀郷終ゑこれを。射ておとしたり。かくてその首級を京師へのぼして。梟首せられたりしかバ。ある人是を見て。將門ハ米かみよりぞ。切られける。俵藤太がえかりごとよて。とよみたりしと云と。或ハ秀郷訛りよりて。將門の妾と密通し。その眞僞を知とも云り。是疑ふべき二ゑ。或ハ云。將門元來謀叛の心あり。貞盛これを猜して。擊んとするに得果さず。此頃將門京ゑあり。伊豫の純友と。

著作館藏版

比叡山より來會して。平安京を直下し。密より逆意と相語ひしと云ふ。これ疑ふべきの三なり。或い秀郷。其始め將門が武勇を聞て其の手より屬バやと思ひて。下總より赴きて。對面をるに。將門歡びて衣冠をも整ゼ。忙しく出迎るに。言語應荅思ふよい似ゼ。よろづ麁忽なりたれバ。秀郷是と見て。其器よあらとて。軈て下野へ立歸り。更に貞盛朝臣と副て。大功と立さりと云と。これ疑ふべきの四ッ。或い云。むじめ六郎公連。將門を諫かねて死せり。こゝ殷の比干より異ならぜと云と。こゝ疑ふべきの五ッ。或いいふ。將門退治の後。九條殿の沙汰として。大將軍忠文副將軍經基忠舊等より勸賞あるべきよしを執ーまうされたるを。小野宮殿强よ。副將軍より功ありと稱ーて。拄まうされしかバ。□部卿忠文のみ此賞より漏たり。面目なくて。內裏を退出たるが。惡心と發しつゝ。天も響。地も崩るゝバかりある。大音を放て。同勅を蒙りて。朝敵を碎くより。一人い賞を得。一人い漏さり。是便。小野宮殿の計ひなきバ生々忘るべからぜ。彼人の家門衰微ーて。末葉永く。九條殿の奴婢となるべし。と罵りて。手とゝたと打て。拳を把りたるより。左右の八ッの爪。手の甲より徹り。血流を出たれバ。紅を罽がごとー。宿所より飯て飲食を斷て死ゼ。果して惡靈となりて。さまゝ〳〵怖しきことありけれバ。靈を宥まうゼべーとて。神より齊て。宇治の離宮の明神とまうそい是ス。といふと。或い忠文の惡靈。宇治の橋姫の神より合ーて。さまゝ〳〵なる祟をなしてたれバ。圓融院の天延年間。京師より。貴賤となく。人多く失さりといふと。是疑ふべきの六ッ。ほ邊い當時。將門が身より著られさるものなれバ。との爲体と。見もー聞もしたるならん。こゝらの虛實を辨論ーて。夜とともより語りあかさバ。こよおき歡會よいゼや。なでふかの〳〵尊卑を論じ。巧拙を褒貶して。眼を瞪らー。相罵るを樂とせん。とく〳〵こなさへ出玉ひねといへバ。件の褻東。呵々とうち笑ひつゝ。忽地より搖き出。見臺子いこの席より。博士と稱せられながら。かバかりのとよ。思ひ迷ふいいかよそや。問る

る所の第一條將門既より。八箇國とうち從へて。平親王と。僞號をたるよいあらず。新皇帝と稱したり。されバ今昔物語にも。新皇と云るして。或い平親王とも稱す。と記されしい。後世のとなへおり。よりて思ふに將門の事。夥ものよ書記したれど。いと〳〵後の人の小說なれバ。實事としがたきぞ多かる。されバ近屬。將門記といふ古書世より出ーのバ。人その概略をーれるなるべー。件の將門記より。朱雀院と本皇とも。又本皇帝とも云るして。將門をバ。新皇と記したり。これ當時の辭なるべし。云かるより後の人い皇と稱せんと憚あれバ。平親王ととなへたるス。將門いかで親王たらんことと望むべき。凡五世の王い。人臣より列りて姓と賜るが。古例ス。又一世の王二世三世の王といふとも。姓と賜りしもあり。これい嵯峨以降の源氏より多かり。又當今の御子なりとも。宣下なけれバ。親王とい稱し奉らず。既より親王にてといしまする子さちに。姓あることなけれバ。彼將門より。平朝臣の姓とかけて。平親王と稱すること。鄙俗の臆斷。笑ふより堪さり。將門い。東藩邊邑の人といへども。暫く京よありて。執政の家より扈從したれバ。かばかりの事云らざるよあらず。もしみづから親王と僞稱せバ。平の姓い除去りおん。新皇と親王と。音相近けれバ。世俗訛りて。今より平親王といふ歟。これも又云るべからず。凡逆乱の臣として。皇と僭上云たりしい。道鏡と法皇と稱し。將門みづから新皇と稱せしのみ。又第二條より問るゝ所の。世よいふ七人將門い。七人の陰武者ありしよいあらぜ。又將門分身して。七人の形狀より見せたるよもあらず。將門の惡と佐たるものい。權守興世王。從四位下藤原玄茂。多治經明。坂上遂高。藤原玄明等なり。加以。將門の庶兄。平將賴。舍弟平將武。をべて七人。其心ざま。をさ〳〵將門より劣らぜ。故より國民。これらが狼戾より害怖て。七人將門と綽號せーのみ。又小說より。將門が眞僞をこらんとて。貞盛秀郷相謀りて。人をもて美人を贈らし。この女子が告さるよつて。蜂谷の動くものを。將門なりと云りてたれバ。貞盛

將門歌を詠しを
貞盛の妻を
いどむ
妻妾妾妾
彼方木丈兄
えらう
文治経明
偽新皇將門
菅原道高

源扶妻
平貞盛妻

こまを射て。父の讐を報ひ。秀郷その首級を得さりといへり。この小説と眞事とそるもの。下總の佐倉のほとりゑ。將門山と唱る小山あり。この處い。往古將門が討をさる蹟なり。件の將門い。美女ゑ惑ひて本形をそられ。終ゑ貞盛秀郷ゑ擊をしかバ。最期ゑ深く彼美女と恨みつ。その女が名を。桔梗前となんいひゑる。されバ今ゑ至て。將門山のほとりゑい。桔梗生せを。他處より根をうつ〜殖ても。立地ゑ枯るゝといへり。凡草木い。土地の肥瘦。寒温の不同ゑよつて。壞ゑあふとあいざるものあり。こい怪しむゑ足らを。こまを將門の怨靈ゑ附會して。桔梗前といふ。美女とさへ作り出せしいを。淺をかなる浮説ならをや。又秀郷朝臣が。將門の妾ゑ通下て。夫の眞僞を探り得さりといふ説い。今昔物語と板せし。注者の説あり。書を引されバ。いよ〜信ドがたし。同書ゑ。將門が兵士等平貞盛。源護扶等が妻を拘て。新皇將門ゑさてまつるゑし見えたり。こゝゑ護扶と一人の名のやうゑ書寫せしい。傳寫の誤ゑて。護い扶が父ゑて。將門が軍兵ゑ拘らをたりしい。貞盛朝臣と。扶朝臣の妻あり。又今昔物がたりゑい。このとき將門が詠せ〜歌をのみ載て。貞盛の妻の返歌を漏〜つ。そのとも亦異同あり。小説ゑ將門い。美女ゑ惑溺〜て。遂ゑ滅亡せしといひ。世俗も又。その美女の名い。桔梗といひ〜なんどいふい。貞盛朝臣の妻妻あるひいのとと。訛り傳さるなるあるべし。將門記ゑ吉田郡蒜間の江の邊ゑて椽貞盛源扶の妻と拘たり。陣場。多治經明。坂上遂高等ゑ中ゑ彼女を追領せり。新皇このとと聽て。女人の醜と匿さん爲ゑ。勅命と下すといへども。勅命以前夫兵等ゑ爲ゑ。悉く虜領せらをつ。就中貞盛の妾と下めゑい妻とし後ゑい妾と妻の誤ゑ剣とられ。體を露してせんかたなし。爰ゑ件の陣頭等。新皇ゑ奏をらく。貞盛の妾い。容顔卑しからず。願くい息詔と垂て。そやく本貫ゑ遣し玉ひとまうせしかバ。新皇勅〜て。女人の流浪い。本属へ返を事。法式の例ゑ。又鰥寡孤獨ゑ。憂恤を加るい。古帝の恒範なりとて。一襲を賜

てゑり。又彼女の本心を試ん爲ゑ。忽地ゑ勅ありて。歌さまいく。

冊爾手毛。風之便丹。吾□問。枝離垂。花之宿緒

貞盛の妾。幸ゑ。恩餘の賴ゑ遇ぬをバ。和之曰。

冊爾手毛。花匂。散來者。我身和比志止。於毛保江奴鉈。

その次ゑ。源扶の妾。一身の不幸を恥て。人ゑ寄て。歌ていへらく。

花散之。我身牟不成。吹風波。心牟遭杵。物爾佐利計留。

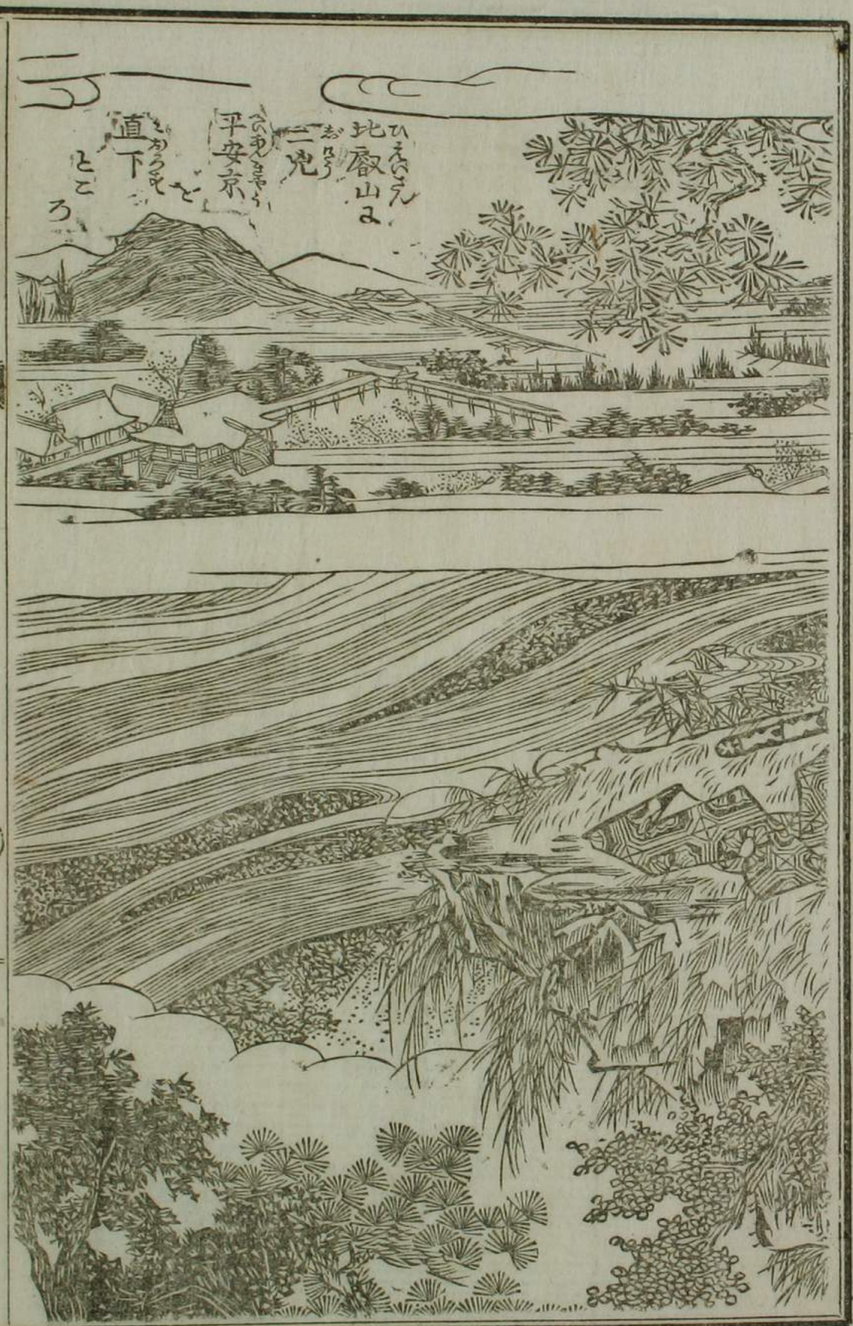
この言を翫ぶの間。人〜和怡て。逆心御止ぬ。とると見え。さり。事の爲体を思ひあいををバ。魏曹操ゑ冀州と擊とりしとき。曹丕眞先ゑ城中ゑ進み入り。遠照が妻ゑる甄氏を掠て。遂ゑ后とをさるゑ似さり。これらの古書ゑ由とき い。貞盛秀郷共ゑ謀りて。將門に美女を抱し。軍畧と懶せしといふ小説の。源淵ををるゑ足なん。いふべき事も多かるゑ。且く息を吻してといひつゝやがて。懷紙もて。額の汗と拭ひけり。

平將門衰龍の裝束の下

さて目今も論せし如く。七人の將門と。いづれとも見さがたけれバ。秀郷竊ゑ美女どもて。その蜂谷の動くものを。眞の將門ゑりと考りてけれバ。遂にこれを射たりしといふ小説い。藤六左近が狂歌より出たり。後にその局と結ぶもの。又一條の怪談を添て。將門の首級。京師へのぼされて。梟られたりけるに。怨靈その首級にとゞまりて。なほ枯ず。夜な〜光とをなちて。目が軀と返せ。頭を繼て。今一軍せん。と呼いりしかバ。人みゑ怖て。近くつものゑし。かくてある人ゑれを見て。「將門い。米かみよりぞ。切られける。俵藤太が。をかりとにて。と詠しかバ。將門の首級。呵

阿とうち笑ひ。やがて目と閉て。死したりといへり。頭うしおれたるもゝの馬に乘て。己が家へ歸りしといふ怪談と。搜神記にも載たれど。誰かこれと實事とせん。件の狂歌ハ。藤六と云もゝの詠さるよし。保元平治物語に見えたり。この藤六ハ。狂言利口とゐて。當時世に忘られたれバにや。宇治拾遺物語卷三之十一條にも。藤六が歌と載たり。むかしよりあみだほとけのちかひにて。よゆるものをバすくふとぞ。忘るこれハ人の家に入りて。鍋によりけるものを。すくひけるとき。家あるじの女に。咎められたるとき。詠るとなん。又仁和寺の藏書目錄にも。藤六傳といふものあるよし。ある人いへりしが。何のかん時の人なりとハ。忘らず。恐らくハ將門より後の人にて。只そのことを詠たるに。やがて人口に膾炙せしかバ。當時小說と作るもの。藤六が歌より思ひとりて。蟀谷の動くものを。眞の將門ありとし。その頭おほ死ざりしおんど云。怪談とバ作り出せしなるべし。件の歌のこゝろハ。田原と俵とかけて。俵藤太といとん爲に。米かみと詠さるこ。實に將門ハ。蟀谷より射られさるとも。切られたるとも。忘るよ實に將門ハ。米かみよりさらをさらんと思ふものハ。歌を得しらぬ世俗の推量なれバ。論ずるに足らぢ。爲義判官少かりしとき。奈良法師等が。神木をふらんく。京師近く參りぬ。と聞えしかバ。防ぎとゞめよ。と仰下さりし程に。宿所へも立歸らぢ。郎黨いづかに召俱して。栗子山へ馳向ひ。軈で追かへしてけり。時の人戯笑歌に。「奈良法師栗子山まで。忘ぶり來て。いが物の具と。剝ぎとらぢ」といふとらるゝ。と詠さりしも。そのこゝろおなじ。實に奈良法師等ぞ。物の具と。剝ぎとらぢ。よいあらぢ。栗子山といふとうけく。いぞ物の具とつゞけ。栗ハ皮とむうるゝものなれバ。剝ぞとらるゝと詠さるこ。今昔物語にハ。貞盛矢とつてつがひて發ちるに。將門が弓手の眼を。胃の綴まで。矢さき忘ろく射出しけれバ。將門無双の猛將なれども。この矢一筋によりて。馬より逆さまに落ちるを。秀郷とせよつて。首をとると見えたり。又將門記にハ。新皇暗に。

神鏑に中て。獨蚩尤の地に滅ぶといへり。將門記に由とさハ。流矢に命を落せしなるべし。又今昔物語に。純友父子が首と。京に持のぼりしかバ。右近馬場にして。そのよしを奏せ。洛中の貴賤。見るもの甚多し。翌日左衞門府生。掃部在上といふ書師と召て。彼首をば覽せんとおぼせども。內裏へ持入るべきよあらぢ。寫してまゐらせよ。と仰下されしかバ。右近馬場にゆきて。其首を寫して奉りけり。頭のかさち。少しもかハらざりけり。此在上ハ。物のかさちと寫さと。殊に妙を得さる書師こ。云々と見えさり。人の肖像をよくうつさもの。昔もありけり。かゝれバ將門が首級の京へのぼりしとさも。觀るもの堵の如くにて。さまざまに浮さる說をおしさりけん。推さかられ侍るかし。又問るゝ所の。第三第四條に。將門純友比叡山に登りて。平安城を直下し。密に逆意を相語ひし。といふと。或ハ貞盛京師に來て。將門ぞ謀叛せんとを察して。こを擊んと思ひつゝ。終に果ざりしといふと。これみな當時の。巷談街說なるを。好事のものぞ。物にも記しさるこ。このとき將門純友。東西に起るといへども。合戰のやうを接ぢるに。聊も謀ト あハしさりと思ふとなし。又貞盛の父。常陸大掾國香ぬしハ。將門に叔父なれども。元來不和なりしのバ。遂に所領のことによつて。互に干戈を動さんとせ。そのこ速に京師へ聞えて。事の邪正と糺明ありし程に。將門上洛して。罪を謝し奉りしのバ。朝議格別に恩敕ありて。東へ歸るとゝ得さりき。この比貞盛朝臣ハ洛にあり。件の將門ハ。己ぞ家の仇となるべきものなり。とふもひて。折もあらバ。暗擊にせんとこそ謀りけめ。後にこのことを傳へ聞もの。貞盛朝臣の武略と稱そるのあまり。此人をしめよ。將門の謀叛せんとをしりて。いく度か擊んとしつれども果ざりし。といへるおるべし。かくて又。國香將門の和讓破をて。土浦の城を落され。國香朝臣討死して。妻子郎黨東西に沒落せしとハ。國香と將門と。美女とあらそひしより事起るといふ一說あり。とまれのくまれ將門ハ。とゞめより。叛逆の


比叡山は
二光
平安京
直下
ところ

鷹小二郎將門
伊与掾純友

良兼朝臣ハ天慶元年六月中旬ニ病死ス三年二月ヨ將門亡滅せり

心ありしまいあらぎ。このとき國司威權衰へて。椽郡司なんど。或い武勇ヨ誇り。或は文才とさのみて。その下知ヨ從いぎ。我意を振ふと多のりしのバ。國香將門叔侄の確執起り。終ヨ八箇國の騒擾とおりしこ。かゝりー程ヨ。常陸前椽源護の子ども。扶。隆。繁等三人。將門ぞの爲ヨ害せられさり。かく惡行超過せしのバ。上總介良兼朝臣大きヨ怒り。將門を討滅さんとく。屢合戰を催す程ヨ。前上總介高望王の妾の子。平良正い。良兼と兄弟さるよつゝく。こを助けて。叔侄頻に戰ふといへども。將門が武勇ヨ敵しがたくて。むかゝしき軍いせざりき。これい承平五年のころこ。見つべし。もゞめい將門一族の確執ヨして。謀叛と名るものなし。唯貞盛朝臣のみ。復讐の志いありながら。勢ひ彼に敵しがたけきバ。且く怨をかくして。將門ヨ從ふといへども。かくてあるべきヨあらねバ。密ヨ京のぼりし。て緣由をヤさんとて。文室好立といもヨ首途する折。將門をやくこれを聞つけて。百餘騎の兵して追せし程ヨ。信濃、國小縣郡。國分寺の邊ヨて。貞盛好立追詰られ。好立い矢ヨ中り。貞盛い辛じて。山中へ隱れたり。玄かるヨ承平八年春二月。權守興世王。介源經基朝臣と。足立郡司判官代武芝と。不治のよしを譖ひて。事おん〳〵と聞えしかバ。將門これかれと鎮ん爲ヨ。武藏國へ立越。既ヨ和睦をとり結ぶといへども。武芝が後陣より。故おく經基の營所を圍みしかバ。經基朝臣ふかく疑ひて。軈て上洛し。事の趣を奏し玉ふよつて。將門又一層の罪を倍て。謀叛のよしと風聞せらる。事ヒや東へ聞えしかバ。興世王も。身の罪遁をがたし。と思ひて頻ヨ將門ヨ謀叛をすゝめよけれバ。將門も亦武勇ヒたのみて。こゝヨヒもめて。東國殘りおく擊靡け。勢ヨ乘じて。京師まで攻のぼらんとい謀りーこ。これい是將門記の趣おり。又神皇正統記にい。平將門い。執政の家につかふまつりけるが。使の宣旨と望みヤけり。許し玉いざりけれバ。憤りて。東國へ下向ーて。謀叛をおこーてけり。まづ伯父の常陸國の大椽國香をせめしかバ。國香

自殺ーぬ。これより坂東を推おびかし。下總國相馬郡に居所と占て。都と名つけ。みづから平親王と稱し。官爵とおしあたへけり。是ヨよつて天下騒動す。參議□部卿惡右工門督藤原忠文朝臣を征大將軍とー。源經基。藤原仲舒を副將軍とーて差つかいさる。平貞盛。藤原秀郷等。心と一ッヨーて。將門をほろぼして。その首を奉りーかバ。謀將い道よりかへり參りき。將門ハ、承平五年二月ヨ事をおこーて、天慶三年二月ヨ滅びぬ、その間六年と經さり。前後そるヨ似さり。こをい只。世ヨいひもて傳るおいヨ。記されさるなるべー。又秀郷朝臣そのもしめ。將門ヨ與せバや。と思ひて。下總へいゆきて見るヨ。將門追從麁忽ヨして。その器ヨあらざりーかバ。軈て下野ヨ立かへり。貞盛朝臣と副て。終ヨ大功とさてたり。といへきど。おぼつかなきとこ。秀郷い。世ヨえらきさる。武略の達人ヨして。その人とおり。朝敵ヨ與そべうもあらぎ。もー果ーて。事を両端ヨ謀りて。初め將門ヨ與せんと思ふ心あらんよい。後の軍功もたのもーからぎ。將門い。もづかヨ東八州と掠奪ーて。もや心驕り。新皇と僭上ーて。下總の亭南ヨ。宮殿を造營して。平安城ヨ擬ひ。橋橋どもて。京の山崎とし。相馬郡大井の津を。近江の大津とー。左右大臣。納言。參議文武百官。六辨八史。とゞゝく點ド定めされど。ひとり曆日博士を闕りといふがごとき。畢竟狂人の所爲ヨ等し。こをらの事い某も。いと苦ゞゝく思ひしこ。このとき秀郷下野よあり。いかでその爲体を傳聞ざるべき。もしその爲体を傳聞さらんよい。共ヨ謀るヨ足らぎとせバ。下總ヨ赴きく。こをと對面して。何かいせん。もし將門いまざ謀叛の心つかぎ。新皇と僞稱せざる巳前よやありぐん。意得がだし。亦彼貞盛朝臣い。ふかく山中ヨ躲きて。仇人の鋒と避け。密ヨ爲憲秀郷ヨ謀ド合ーて。短兵急ヨ。公私の剛敵を滅ぼーたれバ。その功少きことせぎ。その次ヨい常陸介藤原維幾朝臣の息男。爲憲朝臣と。下野押領使藤原秀郷朝臣の功も又大なり。さいれ將門の

立地は滅亡したりしに。忠文。忠舒。經基等の官軍數万人。駿河國まで着まければ。將門は属従ひさる烏合の兵等。このよしを傳聞く。いたく驚き怖れ。或は落うせ。或は隆参し。殘りとゝまる兵は。僅千人は足ぞなりまければ。將門勢ひ究りて。貞盛秀郷は擊きさり。玄のれば忠文以下の大將。みづから朝敵と戰ぞといふとも。その功おしとすべからぞ。又問いるゝ所の弟五條。六郎公連ぞ。將門を諫かねて死しさりといふよしは。遠からぬ世の小説まて。絶くおきと云。將門記は。承平七年十一月五日を以。介良兼。椽源護。並は平貞盛。公雅。公連。秦清文。凡常陸國等。將門を追捕そべき官府を。武藏。安房。上總。常陸。下毛野等の國は下されぬ。と見えさり。かゝまば公連は。將門討手の一人なり。但天慶二年のころ。内豎伊知貝經といふもの。將門と諫めさるとあり。玄のれども將門こをと用ひぞ。却理を非は推て詰りしかば。貝經は舌を卷。口を鉗て閉居ぞ。と將門記は見えされば。この貝經ぞとを唱恨て。公連ぞの事とするまや。又問いるゝ所の第六條は。忠文朝臣。ひとり勸賞は漏さるを。うらみ憤り。握りつめさる指の爪の。手甲へ徹て血を流し。死玄て惡靈となり玉ふ。といふ事も例の小説ぞ。忠文朝臣は。征東大將軍さり。縱自餘の輩と。勳功の賞は漏るゝとありとも。忠文ひとり漏玉はんや。但奥州後三年の合戰のみ。偏裁の沙汰はよつて。勳功の賞行きざりき。奥州後三年記は。將軍義家。國解と奉りて申はやう。武衡家衡の謀叛。そでは貞任宗任はぞきたり。私のちから ともつて。さまゝくうちさひらぐるとをえさり。早く追討の宣符を玉はりて。首とさてまつらんと申ぞ。玄かれども是くしの敵さるよし聞ゆ。宣符を玉はらば。勸賞おこなはるべし。是よりて。くこの例はよつて。文治五ぞんふなるべからざるよし定りぬ。と聞て。首を道はそてく。むなしく京はのぼりぬ。年は頼朝卿。奥の泰衡と討玉ふときも。亦追討の宣旨はかりき。およそ節刀と玉はりたる追討使。官符と玉はりたる國司の。朝敵と討成たるに。勳功の賞行きざるはなし。頼義朝臣の貞任宗任と討たひらげ玉ひたる。頼信朝臣の。平忠常を討滅し玉ひたる。功ありて賞おきはあらぞ。みおこの例なり。按ぞるに。忠文臣朝憤死のよしと作り出

せしは。左衛門督藤原誠信朝臣のことと嫁りていへるおらん。大鏡第五卷 恒德公爲光の段は。左衛門督さねのぶ。亞相を望みゆされしかど。その事かなはでこえられはければ。惡心おこして。三十八歳はてなくおり玉ひき。ぢもくのあしたより。手をつよく握りて。もれはたゞのぶ。みちなりはもゆされぬるぞ。といひて。物もまねらぞ。うつふし〳〵玉へるほどに。やまひつきて。七日といふに失玉ひしは。握りたうびたりける指は。あまりはつよくて。上はこそ出玉ひはけれ。いみじき上ぞそといせし。云々とあると假りて。忠文の事は作りかえたるを。左衛門督誠信と。右衛門督忠文と。官爵名告も。その唱似かはひたり。これらむかしの小説なるを。軍記はさへ載られたれば。世俗大かた忠文の事をと思へり。宇治の橋姫と。その怨靈合せしといふ怪談も。この人宇治は住玉ひたればいふを。又將門追討の官軍は。朝敵滅びぬと聞て。駿河國より。京へ歸り參りたるよし。ふるく物は記したれど。將門記はよるときは。官軍既は。將門が擊をたるを聞といへども。途より歸洛せしはいあらず。海道の擊手の將軍。刑部大輔藤原忠舒。忠文の弟下總權少椽平公連。軍記は將門を諫かねて自殺を押領使として。四月八日ともて入部して。即謀叛の類を尋擊。その内賊首將門が舍弟七八人。或は髮髮と剃除して。深山は入り。或は妻子と捐棄て。各山野は迷といへり。このとき與世王は。上總國はて生拘らを。將門ぞの兄將頼と。藤原玄茂は。相摸國は到て。官軍は殺害せられさるはなん。玄のもこの忠文朝臣は。智勇も大のさはいあらざりけるにや。佐々木三郎兵衛尉盛綱法師三念ぞの言は。吾聞。天慶年中。平將門東國はふいて。叛逆を企しとき。宇治□部卿忠文追討使さり。膳を差るの間。この宣下有べきの旨と聞。戸部箸を拋て。坐を起て則參内し。節刀を給るの後。歸宅は及ばす。直に洛外は赴きぬ。勇士の志をところ。これともて善とそ。と東鑑は見えさり。かゝれば忠文。なほ官軍の後きさるを俟んとて。所々は滯留し。終は合戰はあはいざりしと

齊信 恒德公の二男 權□納言 正二位 道信 恒德公の第三子 從四位下右中將 共は 誠信の弟おり

いふ。無稽の説い信ぢるよ足らぢ。何ものか惡の字をこのけそじめて。神皇正統記よい。惡右衛門督と記されしよや。傳寫のもの。信賴ととりちごへさるの。又宇治惡左府と思ひさごのへさるか。こゝろ得がさし。この人宇治よ住けきバ世擧て宇治の□部卿といひひり。鷹と好みく夥飼ーこのバ。二品式部卿重明親王。醍醐天皇の子みづのら宇治よいゆきく。忠文よ鷹と乞ひとり玉ひー事。今昔物語第三十卷よ見えさり。又門將第三の女兒尼となりて。如蘊と法名し。奥州惠日寺の側よ。菴を締びて寡居ひり。有一日病く頓死したりけるよ。地獄井の冥助よよつて。蘇生ぢさりしかば。世の人。地獄尼と渾名しつ。年八十餘よして迂化ぞと。元亨釋書十八よ見えたり。又將門の子よ。平良門といふもの。攝州多田の城と攻く。滿仲朝臣を擊んとして。却て源二綱よ擊ぢさるよー。物よいへり。よい究めさる小説よて。ありつるとよいあらぢ今昔物語よ。源宛と。平良文と。常よ武藝の甲乙と爭そひ。有一日各。軍をとゝのへ。廣野よ出く勝負を試しよ。おとらぬ弓馬の達者なりしのバ。互よ感じて。和睦ーさるよーをいへり。彼宛ぞの字と。三田源二といひ。良文ぞの字と。村岡五郎といひひり。よりて宛を綱とー。良文と良門とー。良門が多田攻といふ事を作り出せーこ。大系圖をもて推ときい。將門の子よ。良門といふものおし。良文い高望王の季子よて。從五位下。鎭守府將軍さり。村岡五郎と稱ぢ。便將門ぞの叔父こ。將門の子よ。良門といふもの出家して。生涯行ひすまーてありひるよー。何やらんよて見たりしぞの書名を忘きされバ。頓よい搜り出しぞさし。これも是否い云ぢらぢ。又平貞盛ぬーい。心ざま猛くーく。凄じき人なり丹波守よて在任の時。惡瘡出來ーかバ。京よを醫師を迎下ーて見せければ。兒子といふ藥ならでい治ーぞたーといふ。見干とい。孕婦の腹をさきて。男兒なれば。それを藥よ加く。調劑ぞるとなん。貞盛その子の左衛門尉維衡を呼びて。この藥を求ると。世よ云られてい。身の爲あしかりなん。汝ぞの妻懷妊なり。その腹と裂て。貞盛丹波守たりしこといまだ考を得ず息維衡い遊倅のときよて父の任國へ携られさるべし既よ左工門尉さらんよと京よとともよ丹波へ趣くべからぢ

れよ與へよといふよ。維衡こゝろよい驚きなぞら。うゝ玉いりぬ。と應く。さて醫師許ゆきて。かゝる事あり。いかよせんとて泣よけれい。醫師聞て。貞れその難とのぞしまゐらすべしとく。館よゆきく。藥いもとめさせ王へりや。と問バ貞盛点頭く。それい左衛門尉ぞの妻の。懷妊ーたるを。乞うゝて置さりと荅ふ。醫師聞ゐあへぢ。そしい何よかせん。貞ぞの胤い藥よならぢ。とく求めかへ玉へ。といへバ。炊女の懷妊ーて。六月よなるを引出さーて。腹をさきて見るよ。女子なりけれバ。又外よて孕婦を求て。藥とゝのへさして。病ぞ愈ーさり。さて醫師よい物多くとらしく後。子の左衛門尉維衡を呼びて。貞の瘡の。兒干よて愈さるよーを。彼醫師ぞの人よいいんと疑ひなし。京へ歸りのぼるを埋伏ーて。害せよ。といひけきバ。維衡一議よ及バぢ。承引て潛よ醫師よ。その事ぞ告ぢらせーかバ。判官代を馬よ乘ーて。醫師い步よりゆく程よ。維衡い山蔭よかくれゐて。盜賊のごとくもてなー。判官代ぞ。一箭よ射殺ーて。館よ歸りて。射ころーしひー。といへバ。守貞盛げよさぞわらん。といひて。その丶ちい强ていいぢ。こきい貞盛が一の郎黨。館諸忠がむすめのかさりけるを聞つきて。かくかさり傳へさるありぞと今昔物語卷の第六よ見えさり。あるべき事とも思いきねど。既よ云つるものを指して。たーかよ書とゝめされバ更よなきとえとも誣がさー。もし果して如此ぢらバ。貞盛朝臣い。人情よも漏たる。罪ふかき人なり。是を思ひ。彼をおもふよ。その心ざまの猛く。虎狼よ異ならざる。そもく將門よ劣らぢとせん。宜なるかな七代の孫。淸盛入道よ至く。その暴究り。子孫遂よ朝敵の罪名を負ぬ。又彼醫師い。いかよこゝろえさるやらん。醫い仁術とこそいへ。母を

殺して。その赤子を。藥よせよと教さる。これが心ざま。又貞盛ぬしよ劣らぢ。いと憎べきものゝかー。こゝよ多く引き用ひたる。將門記といふものゝ。承德三年正月廿九日よ。大智坊よ於て拜書ぢ。と奥書あり。堀川院のゐ宇よ當をり。現よも此ころ書綴りたるものとおぼしくて。御教書おんどといふとも見え。ぢべて漢文よ擬して。書ざまいと拙けきども。究めて古書ゝ。こゝよゐ婦幼のためよ國字もて抄録せりおのきい將門ぬしの古衣おきども。よさといよーといひ。あしきをばあしといふて。物みな匿ぢとなし。敵となり身方となるも。顯身の世よあるほどよこそ。死しての後い何かあるべき。されば人いむかしの人よあらで。辞い後よ遺るもきど。多くい訛を傳へて。訛を去らぢ。實事ぢくおく。虛言おほかるい。物の本の常なれば。實事もよし。虛言も又あしからねど。よく史と讀。實録を閲して。さて紙草物語と見さらんよい。よりて來ぢる所を去るから。虛實いこゝろよ辨へ易し。書を見く理義を尋ぢ。心よ求るとなきい。遊べる山よ迷ふごとし。善を傳へ惡を傳へ。あるとをありとし。又なきとをありとそるも。皆是書の中よあなれば。勉てその惡と懲し。その善を勸んと思ふのみ。去のれば人もゆるしぬべけれど。せめてもの罪はろぼしよ。かゝる遊びをおすよこそ。求めて古人を非るよいあらぢ。よく聞玉へりや。といへばみお。鼻うちかみてぞ感じいりぬ。

第八　眉間尺ぞの髑髏盃

浩處よ。ふるびたる唐木の匣よ。高紐かけて。眉間尺ぞの髑髏盃と寫れさるぞ。古衣の迹よ居かれば。衆皆ひとしくまれと見て。世俗よとさ〳〵去られさる。眉間尺ぞの髑髏もて。作ぢる盃ならばいと奇し。その紐ぢやく解てよ。といふよ。傍なるもの手とかけて。軈てぞ蓋をとる程よ。忽地跳り出るものゝ。おもふよも似ぢ木と彫て。底ふかくーさる盃へ。鞆繪を金よて泥さるおれば。みな呆ぢ果て笑と忍び。匣書つけよ髑髏とあるよ。こゝ匣と盃をとり。合せさるものおるべし。髑髏盃といふものゝ。人の頭顱よ漆して。酒器とせーものおるよ。木彫おればおかーからぢ。これいいかよ。と訝ぢば。盃も又歎息ー。何故よこの名あるよや。某も絶て去らぢ。彼眉間尺といふ猛者ゝ唐山楚國の劒匠干將莫邪が子とぞいふおる。楚王の妃肥満て。夏の日の熱を苦み。常よ鐵の桂と抱きつゝ。身を冷し玉ひしかば。終よその氣に感ドてや。孕て鐵の丸と。いとおもやかよ産玉ひぬ。是最上の鋼錺おれば。楚王これとも干將よ。劍を造らし玉ひゐり。干將命とうけ玉ゝり。その妻莫邪に合鎚うたし。凡三年よして雄雌の。劒をば作り出しつ。さて陽の劒と干將と名つけ。陰の劒と莫邪と唱ふ。これ二ながら進らせんこと。いと惜く思ひしかば。陽の劒を深匿して。陰の一口をたてまつるに。楚王その成ぢることの。遲ぢを怒りて立地よ。干將を殺してゐり。去かるに干將が遺腹の男兒おりけり。彼ぢや成長よ及びて。身の丈高く。膂力つよく。眉の間の廣きこと。一尺よおまりしかば。眉間尺とぞ喚れける。かくて有一日母莫邪よ。父のことを問しかば。母ゝ啼泣ゐが子よ對ひ。おん身が父ゝ楚王の爲よ。劍を作り玉ひしが。三年よして作り果たり。王その遲を責。又二ッおるべき劍の。只一ッおるを怒りて。家よもかへさで殺し玉ひき。かくあるべしと豫て去れば。ゐ身が父去ときよ。吾儕よ密語玉ふやう。見れゆかば殺されおん。戸を出て南山を望まば。松石上よ生り。劍ゝその背よあり。瞋なる子成長。後よ問ば如此答よと。宣せしと告よければ。眉間尺大きよ驚き。父ゝ非命の死を悲みて。やがて南山よ赴きつゝ終よ件の劍を獲て。楚王を狙擊んとす。かゝりし程に楚王の夢よ。一個の少年の。眉間の廣きこと。一尺おまりおるが。王を父の仇として。擊んとすとゆめ見たり。よりて心よこれを憎みて。眉間尺が頭をとりて奉らば。千金を賜べしとて。國中よ募しかば。眉間尺脱れ去て。山中よ呻吟ほどに。客ぢからずこれよあふて。そのうち歎く故ぢ問よ。父の仇人を報ひかねたる。事の顛末ぢ物語れば。客聞

干将の剣三頭を烹む

行客

楚王

壽仁舎藏版

みけん尺千赤

著作館藏版

て感激し。これ聞よ。楚王頻よおん身が頭と。干將の劔を求む。これと護て献らバ。恩賞限おからんとなり。もしこの二物をこれよ借さバ。これ必おん身が爲よ。仇を復ふべーといへバ。眉間尺歡びく。やゞてみづから刎つゝ。頭と劔を両手よ引提。生るが如く立さりける。客こゝを見く涙を流ー。これゆ身よ屑じ。と言を放て誓ひーこのバ。軀い撲地と仆をゝり。かくて客は。頭と楚王よ奉きバ。王歡びてこれを見るに。眼を瞪らー齒を切る。なほ生るよ異ならぎ。客王よ申さやう。これい勇士の頭なり。煮爛ー玉へといへバ。王こゝよ煮さゞのひて。大なる鑊よ湯と さぎらし。これを煮ると三日三夜よ及べども。爛ばかりも色かいらぎ。王これを怪みて。みづから鑊のほとりよいゆきて。さし覗んとする所を。客い背よありて。干將の劔を引拔。王の頭をうち落せバ。鑊の中へ撥と入る。客劔ととりなほーて。みづからも刎ねて。三の首鑊の中よてもろともよ爛をつゝ。何をを王ともこゝさげれバ。楚王の臣等。三ッの頭を。一ッよぞ甍りぬ。今おほ汝南地の北のさ。宜春縣の界なる。三王墓これなり。といと。ふるくより漢土の。書よも見えさりとい聞なごら。これい盃の事なれバ。醉客よのみ伴きて。物の善惡を辨ぎべき。力なけきバ忌々しき。髑髏盃の名を屑せられ。春の初の屠蘇白散より。上巳の桃花酒。端午の菖蒲酒。重陽の菊花酒なんどい。香と顫さるとゝもなく。祝義の席へ面出しならねバ。いと朽をしく思ふ。見臺先生ごの爲よ。名つけ親のわしきよしを。明白よ說あかしく眉間尺といふ。名を除き。髑髏盃の稱を削りて。めでさき席へも折々い。立入さして玉へのー。とうち芝折つゝのき口說バ。見臺先生うち点頭おん身が。述懷理りえ。これい靹繪を附さるまよつて。眉間尺の名と屑し。底圓くして深けきバ。髑髏盃とい唱へしならん。世俗靹繪の故實としらぎ。或い眉間尺等三人の頭。鑊の中よて戰ふ象あり。といふ。無稽の俗說と聞とりさる。生好事がかくのごとくよ。殺風景をなせーなるべし。又猜そるよ。原この盃へ靹

繪をつけさるも。ともろ浪の紋と謠ふご如く。水のうづまく形とこゝろえ巴字とともろと訓といふ。俗說と思ひよし。曲水よ觴を流そといふ故事もあれバ。靹繪をバ畫ささらん。ゑかれバ彼も是も。みな俣え。夫靹繪い眉間尺等三人の頭よもあらぎ。又巴水よもあらぎ。靹い古訓由伎え。又古の俗まれと褒武多といへり。應神天皇の產せーとき。宍腕の上よ生たり。故その名を稱て。譽田天皇とまうす。上古の俗靹と號て。褒武多といふと。日本紀よ見えさり。この靹といふものい。むかー射るものゝ。臂へこのくる戎具え。ゆさといひ。ほんさといひ。ともといふ。その唱い異なれども。その物い同じ。むかー神社へ。大刀。鍛。弓。箭。鏡。玉。靹。馬などゞ進そるよ。或い木ともて造り。石をも て造り。又畧ーてその形を。畫さてもまゐらーたれバ。靹の繪といふ。のゝ字と約て靹繪といへり。今なほ馬を畫きて神前よ掛るを。繪馬といふごとし。この繪馬も。眞の馬を奉納ゑのさきもの。その形と畫してさてまつりしより。繪馬の號い出來ーえ。かゝきバ靹繪も。神へさてまつるより起るものとこゝろ得べー。一ッ靹繪三ッ靹繪なんど云い。其多少よ從ふのみ。亦目今演られさる。眉間尺ごの事い。晉の干寶が搜神記のおもむきえ。ゑかれども搜神記よ楚王の妃の。鐵の丸と產さりしといおし。亦干將ごの子の名と。赤といふよし見えて。眉間尺と唱るといおし。この方の軍記よ。赤ごの事と引とく。搜神記よ。眉間の廣と一尺とあきバ。やゞて眉間尺とい名つけさり。さて彼搜神記卷ノ弟十一 一 ふいふ所い。漢の趙曄ごの吳越春秋を此彼撮合して。一條の物語といゑさるえ。この吳越春秋といふものも。當時の小說おれど。いと古きものおれバ。虛言ありとゑりつゝも。文作るものゝ常よも引り。吾おもふよ。搜神記よ。干將ごの子の赤ごの。眉間一尺とゑるせしい。かの吳越春秋よ。伍子胥ごの眉間。一尺とあるを借用ひさり。吳越春秋まきの十一の弟十五張よ。吳王僚ごのむじめて。伍子胥と召て見る段よ。王僚その狀の偉おるとあやしむ。身丈一丈。腰十圍。眉間一尺。云云と見えさり。かゝれバ眉間尺とい。伍子胥といふべし。まさ干將莫邪が

雄雌の劍と作りしとい。同書卷二ノ。戰ハ騎射の功。いまざ用る所あらぜ干將ハ請て。名劍二枚を鑄らしむ。干將ハ吳人ノ。歐冶子と師を同ぜ。俱ハよく劍をつくれり。みれより先越の國。二枚を來獻りしのバ。闔閭吳王の名これを得て寶とぜ。故をもて。劍匠して。亦二枚を作らしめり。一を干將といひ二を。莫邪と云。莫邪ハ干將ぞの妻なり。かくて干將劍を作るハ五山の鐵精。六合の金英を采り。天ハ候ひ地ハ伺ひ。陰陽光を同ハし。百神臨觀ぎども。天氣降らぜ。金鐵の精鎖ぜーて淪流る。こゝハ干將其由知をらず。かくの如くあると三箇月ハ及べり。遂ハ莫邪ぞの云ハまのーて。夫妻俱ハ冶爐の中ハ入る程ハ。干將ぞの妻。髮を斷爪を剪。童女童男三百人ーて。藁と皷。炭を裝ひ。夫婦合體して。陰陽の劍成きり。干將その陽と匿して。その陰を獻りぬ。闔閭この寶劍を得ハる折。魯の使季孫來きり。よりて掌劍大夫をーて。莫邪を季孫ハおくりつ。季孫劍を拔て見るに。鍔の中缺ハるとぞ。黍米のごとー。歎息して鞘ハ納めハの劍ハ。實ハ天下の寶なり。今寶劍のいできハるハ。吳の霸王ハるべき祥ノ。惜のな缺るとまろある故ハ。亡んとも又遠ぞのらじ。これハの劍と好むといへども。受ぞのさしとて。受ぜして去りぬ。闔閭又國中の金鉤鉤ハ吳の刀の名ノ又。曲刀ノを作るものハ仰て。よく鉤を作るものにハ。みれと賞ぜるハ。百金をもてせんといふ。時ハ作鉤者。利と貪るぞの爲ハ。その子二人を殺し。血釁て遂ハ二鉤をつくりなし。みれを吳王ハ獻りて。賞金と求ぎバ。闔閭のいへらく。鉤どつくるものハ多ハり。汝ひとり賞を求るハいのにそや。といへバ作鉤者答て某ぞの鉤ハ。貪る故ハ子どもを殺し。血釁て終ハ二鉤をつくりぬ。かゝれバ凡常ハ異ノといふ。王これを聞て。去のりといへども。ヨぞの鉤ハ甚多ハり。既ハひとつハ藏めたれバ。みれとヨきぞのさし。といへバ。そのもの夥の鉤ハ對ひて。ふさりの子どもの名を呼びつゝ。吳鴻。扈稽ハ何處ハある。とく出よかし。と呼もあへぬハ兩の鉤跳り出て。父が胸ハそ著たりける。吳干闔閭これを見て。且怪み且嘆ト。やがて百金と與へけり。第二張より第四張ハ至る。今國字をもて譯するゆゑハ。こゝハハ只要を摘めり。見つべし吳越春秋ハハ。吳王とありて。楚王といいず。又干將を死すことなし。これを搜神記ハ假借して。吳王を楚王とし。三月を三年とし。魯の季孫が劍を相して。鍔の中黍米バかり。缺たる故ハ遠からず。吳の亡んといひしをとりて。楚王ハ干將の劍の故ハ。頭を喪ふよしを作り。又作鉤者が子を殺し。血ぬりて賞金を求めしとあるを假て。干將が子みづから刎ね。劍と共ハ客ハ。托せしとハい作りかえたり。又客が命と捐て。干將が子の爲ハ。楚王を殺せしと作りしい。專諸がことと假たるノ。これも又吳越春秋卷一ハ伍子胥ぞの楚國より脫て。吳國へ入りし比。吳ハ專諸と呼ぎハる。勇力無双の俠客あり。伍子胥こきハ相語よりて。公子光闔閭ハ汲引し。彼專諸を養ーつ。そのゝち公子光が。王僚をむかるとき。炙魚の中ハ劍をかくー納れ。專諸をして王僚と。刺せしとあるを嫁りたり。又客が故なくも。赤所眉間尺が爲ハ命を輕しとせしよしい。蘆中の人を擬したるあるべし。伍子胥が楚と逃て吳に入時。追兵背ハ迫ぎども。津ハ舟なし。時ハ蘆の中より。一葉を漕よして。子胥と渡し。又餉とり出て食せしかバ。伍子胥い叮嚀ハ。再生の恩を歡び聞え。ヨが事とな忘をても。漏し玉ひそ。といへバ蘆中の人喜バず。ヨれ人に告ぜとも。もしこれと云るものあらバ。ヨ身ヨれと疑ひなん只面りに死て。疑ひなから去めんハい。といひもあへぜ忽地入水して死したりと。亦是吳越春秋ハ見えたり。戰國の仁俠なるものハかゝる類多し。これを假りて客の事とせし歟。赤眉間がもの語の。全體と推ときい。伍子胥が楚國へ改入りて。楚の平王の墓を發き。屍を笞て。父の仇を報ひし。史記に傳ありとある趣を作りかえて。干將が子の。仇擊の事ハい云ハり。又楚王の。干將の頭を獲て。こきと煮ると三日三夜ハーて。そのいろ變らぜと。作りーい。呂氏春秋卷の十一。至忠篇第四張ハ。齊の湣王が。怒て文摯を煮ると。三日三夜ハーて。其色變らぜとあると嫁りたり。呂覽ハ。齊王即齊湣王ノ。宣王の子。

病を疾り。人を宋國よつかハして。文摯を迎へむ。文摯至て。王の疾を視て。太子よまうそやう。王の疾ハ必己しつべし。ゑかりといへども。王の疾己ときハ。必ヱれを殺ー玉ふべしといふ。太子その故を問ふ。文摯答て。王の怒彊からざれバ。その疾治そべからぢ。王と怨らるるときハ。ヱれ必死れおん。といふ。太子これを聞て。文摯と拜手。苟も王の疾已んまハ。臣母とともよ。死をもて王よ爭ふて。必こきと救ふべー。願ふハ先生。患ひ玉ふおと。いふよ文摯点頭て。ヱれ死をもつて王の爲ふ。療治をせざらんや。と承引つゝ。太子とその期と定めさり。かくて王の召と。三さびよ及べども到行ぢ。王既ふ怒ると酷し。やうやくよ志て文摯まゐきり。ゑかきども。病牀ふ登るふ。履をも解ぢーて。王の衣と履汚ーつゝ。その疾を問バ。王まぢ〳〵怒て。與ふ言ぢ。只いさく叱退んとそるふ。文摯なほ退かぢ。こゝふ於て玉の疾頓ふ己ふき。ゑかるふ怒酷ーきが故ふ。左右ふ命て生ながら。文摯と煑よと。いきまき玉ふを。太子と王の后と。急ふ爭ひいさめて。こきを救んときとも聽れぢ。遂ふ鼎をもて生ながら。文摯をそ煑たりゐる。かくてこれを爨と。三日三夜ふして。顏色變らぢ。そのとき文摯頭を擡て。誠ふヱれと死さんとならバ。などて覆して陰陽。の氣を絶ざるといひーかバ。王そなハち覆をさして。文摯遂ふ死ーさりといへり。こきと搜神記ふ。楚王干將が子の頭を煑ると三日三夜ふして顏色變らぢと作りかえ。亦彼宜春縣の界ふ。三王墓と唱る古墳あるふ因みて。三ッの頭といふもひ作せーならん。こきらみな虛妄ふ過さきども。いふしへの小説ハ。その出處ふ必父母あり。又本邦中葉の小説ハ。唐山の小説と。作りかえたる多かり。ゑこれども世俗。覽ると博からざるものハ。その虛言なるを考りて。出處あると考らぢ。婦幼ハこれと實事と。その虛談を考らぢ。されバ小説を作るとの。客易からざる。いへバさらニ。よく視んとも又難し。又和漢虛實暗合のとありたり。日本紀安康紀ふ。眉輪王。父の仇と稱ーて。天皇と殺ー奉る。雄畧紀ふ。眉輪王逃れて。圓大臣の宅ふ入りつ。天皇雄畧使を遣してこれを求玉へバ。大臣そなハち。その女韓媛と。葛城の宇七區を獻りて。眉輪王と。黒彦皇子の罪を。贖んと請まうせども。天皇聽さぢ。火を縱てその宅を燔し玉ふ。於是大臣と。黒彦皇子。眉輪王と。三人倶ふ燔死さる。時ふ坂合部連贄宿禰。皇子の屍を抱て燔れぬ。その舍人等。燒る所と收取るふ。骨と擇みごたけれバ。これと一ッの棺ふ盛て合葬し。新漢擬本南ふ立ると見えさり。眉問尺と眉輪王と。その音相似さり。又眉問尺と。楚王。客の頭。煑爛をく分別ゑぐさし。故ふ楚國の臣下。三の頭を。宜春縣の界ふ合葬して。三王墓と唱ふるといふ。干寶が小説と。眉輪王と。黒彦皇子。圓大臣と共ふ燔死されて。骨と擇ごたし。故ふ贄宿禰ご舍人等。合葬して新漢擬本の南ふ立ると云。日本紀の趣と。粗相似さり。天地の間物として。對なーとそべからぢ。かゝれバ韝繪と水の文なりと思ひ惑。曲水ふ觴を流そといふ。故事ふ因たる生物と。又韝繪ハ眉間尺等三人の頭を。象りさるえ。と思ひ惑て。髑髏盃と名つけさる白物と。亦一對なり。今まそあぢ。眞の眼もさらん主ふ遇ハゞ。よからぬ名とバ除かるべし。ゑバしまち玉ひといへバ。盃ハ歎びつゝ。舊の匣ふゞ入りふける。

擬本の擬ハ槻の慣

第九　槻逸勢薄命の一行物

亦その迹へ推ひらのする。書畫一張の懸幅ハ。二八ばのりの尼君の。墨の衣ふいといたう。褻きても身からぬ。殊にふりたる肖像ふ。妙なる筆の跡とめて。富貴他人合。貧賤親戚離。と題せしハ。これなん當時三筆の。その一人と世ふ名たゝる。槻朝臣逸勢が。一行物と考られたり。そのとき古畫の尼君ハ。思ひあまれる眉うち頻め。ヱらハゝ彼薄命人。逸勢が女なる。妙沖ふて侍るかし。さてもヱが父年老て。思ハずも伴健岑が。謀叛の事に坐せられて。東路へ流されて玉ひしが。配所までハ得もゆかぢ。旅にむなしくなり玉ふ。さをどその罪ふあらざれバ。終ふ大赦の時ふあふて。

白骨歸洛の朝恩ゑ澤ひ。剩位を贈られたるゑ。傀儡の謠曲ゑ作りしものが。あらぬ惡人に書綴り。伴の强宗とやらんいふ。名も聞知ぬ叛逆人の。副淨ゑつかひしかゞ。婦幼いおしなべて橘逸勢い。大惡人ぞと。憎み思へり。このことりを說あかさずゞ。生る世の寃枉より。死ての後の誣言に。父尊靈のいかゞかり。心苦くおぼしらめ。既ゑたーかな證文あり。文德實錄卷之一第二十張ゑ嘉祥三年。五月壬辰。流人橘朝臣逸勢ゑ。正五位下を追贈ー。詔をおも。遠江國ゑ下ー玉ひて。本鄕ゑ。歸し葬らし玉ひ。抑逸勢い。右中辨。從四位下。入居の子ゑ。性とおり放誕ゑて。細節ゑ拘らぜ。尤ゑて隸書ゑ妙おりき。されゞ宮門の榜題ゑ。この人の手跡見在せり。桓武のおんとき。延曆の季。遣唐使に隨て。唐朝ゑ到りーこのゞ。唐の中父人。おれと稱く橘秀才といひーとなん。かくて歸り來るの日。夥官を歷事ーご。年老羸病さるをもて。閑居ーて仕さてまつらぜ。かゝりし程ゑ承和九年。連ゑ伴健岑ご謀反のとゑ染らきて。稼拷ども服ぜ。よりてその死を減らも。伊豆國へ配流ぎ。ゑじめ逸勢ご。配所ゑ赴くとき。只一女あり。悲ーみ泣て。父を慕ひ。步よりぞ從へゞ。官兵監送者こをを叱りて。從ふとを許さねども。女兒いおほ遠くも去らぜ。晝い止て夜はゆさ。潛やこのゑ從ふ程ゑ。逸勢い遠江おる。板築驛まで到行つゝ。ゑゝゑ逆旅ゑ身まのりゑり。女兒い天ゑ叫びつゝ。地ゑ輾轉て悲めども。救ふべうもあらざれゞ。やごのく驛下ゑ葬りて。喪前ゑ廬を締び。屍を守りて遂ゑ去らぜ。落髮ーて尼となり。妙中とおん名告ゑる。されゞ。亡父の爲ゑ。誓念小霎時も。解らぜ。曉るより暮るゝまて。苦行凡常ゑあらざれゞ。路人もこれごの爲ゑ。泪衣襟を濡ーぬ。かくて歸ー葬をと。詔あるゑ及びて。女僧い父ごの屍を負て。晴やこのゑ歸京せしのゞ。時の人感嘆ー。稱て孝女と呼びなせり。又同書の卷の五の。第十二張ゑ。仁壽五年。五月甲寅。正五位下橘朝臣逸勢ゑ。從四位下と。加贈ー玉ふよーを載たり。このやうゑ正史ゑ見ゆをど。國史見る俗稀

なれば。實事は去らで糸竹の。よゐたりよひく鮠曲を。さもまそ。と思ふものゝ爲よ。驚し侍るのー。凡物語と作るよ。善人を惡人よして誣せ。惡人を善人よ作りの之せ。善を勸め。惡を懲ー人情を演。理義を正そと。野史とも。眞の小說とも。唱ると聞えさるよ。惡人ならぬ。ご父と。惡人といいるゝ朽とーさ。推量あを。といひのけて。うち酸鼻玉ふよそ。みなもろともよ目を拭ひ。かく聞ば。逸勢ぬーゝ。學問も。よー。手迹もよー。唐山までも名をとゞめー。いとも愛たき文人なり。一旦罪を得玉へども。身後よ罪なきよー聞えて。位さへ贈り玉いると。みなまき御身ご孝行を。神も憐み玉ふほどよ。君も恩惠せ玉ふよなん。もつべきものゝ子ありゝり。かゝる孝女のありとも去らせ。妙冲尼といふ名とそら。今とじめて識る鈍ましさよ。これらの條まそ草紙のとじへ。書もとゞめて世の少女子よ。孝行を勸るご。書作るものゝ本意なるべー。され傀儡の諧曲よゝ。その名の猛く聞ゆるとば。善人よても丑淨とー。その名の優よ聞るとば。よからぬ人でも正生へ。扮まいりを付るならん。されば左大辨希世のごとき。曾家左迂の事なんどよかゝづらひたる人よいあらねど。まいりあいせのよからずーて。震死れ玉ひーのば。佞人の部へ入られて。世よ惡名と謠いるれど。去る人そ去るよーあしの。浪花の事ののりならぬ。遊び戯れ玉ひね。とみな叮嚀よ慰さば。嚇ーさ人の言の葉よ。花開ぬ身も春よあふ。こゝちこそそれいいで見れ。世をも俗とも恨むべき。と阿應つゝたつ皆衣。身の幅廣き尼少女ごの孝の德こそ有ごのたげれ。

第十　紀名虎錦の續鼻揮

扨その迹へ呼出すハ。身の幅二尺五六寸。長い一丈有餘よて。いとも地太く逞しき。大和錦の揮衾。亟たる厚綿燃立ごとく。あたりと拂ふ意氣揚々。現古の最手あらめ。と稱贊せざるいなかりけり。當下錦の續鼻ハ。席上狹しと夷坐で。掌三二ッ四ッ拍鳴らし。妙冲善尼の世に稀なる。孝行の物かたりよ。衆感涙と拭ひあへず。うち去めり玉ふそが中へ。獨角觝の問ずがたりハ。大人氣おくも思いれん。吾ハ仁明帝のおん戯よ。御船氏主と比へ玉ひし。力士氏長が揮衾おれども。さるものありとも去らざれば。例の白徒が事を好みて。紀名虎の名を負し。傳來帖さへ物々しく。綴りおせしとまづ讀むべきよ。笑ひを忍びて聞玉へ。抑人皇五十五世。文德天皇崩れ玉ひし頃。惟喬惟仁兩皇子。位と爭ひ玉ふ程よ。大臣これを定めかね。おの〳〵角觝の勝負よよつて。即位あるべし。とまうせしかば。朝議やうやく一決す。かくて兄弟の皇子。互よ力士と出しつゝ。勝負を爭いし玉ひしが。惟仁親王の相撲人。晴やかよ勝にければ。三司百官惟仁と。王位よ即まゐらす。清和天皇すおいちこれゑ。或いいふ。惟仁親王のおん方より。孔雀三郎業平といふ。美男の殊よ膂力あること。野見宿禰よも勝ると出し玉へば。又惟喬親王ハ。外祖父紀名虎を出されて。彼業平よ番ー玉ふ。名虎も聞えし力士おれども。天命歸する所よやありけん。名虎が虎の勢ひも。孔雀の蹴爪よ蹉つけられ。いひかびなくも屑よければ。玉位忽地定りて。弟皇子の歡びハ。兄皇子の患ひとおり。名虎ハ遺恨やるかたおく。自殺してうせよければ。惟喬も世と墓おみて。墨の衣よ容をかえ。柴の扉よ入り玉ふ。と作り設し小說傳奇を。そのまゝ寫す。傳來書。これこそのとき紀名虎が。晴よ結びし。犢鼻揮おりとて。弄賣さるゝ傍痛さ。我いいよしへ阿刀根繼と名をひとしくせし大力士。伴氏長が像見おるよ。彼王位爭ひと。名虎朝臣の名ハ高く。世俗の去る小說なれば。あらぬ名をこそ負したれ。角觝とつたる事いなきよ。名虎ハ義理を缺とてる。かゝる犢鼻揮去玉ハんや。されば世よいふ東宮定め。惟喬惟仁の確執といふ事ハ。由るかたもなき小說なると。傀儡の諧曲よさへ作りしかハ。天晴おる故事とこゝろ得。婦幼爺婆ハ。さもありけんと思ふおるべー。見れハ仁明のおん時よ。伴氏長よ隨從たれば。淸和天皇即位

傳奇の虚錯紀名扇と
孔雀三郎業平と角觝の丸

の事と。親しく見もし聞もしつ。又その後よ。三代實錄を撰れたきバ。物數多く云よ及ず。三代實錄卷の一よ。清和天王諱ハ惟仁。文德天皇の。第四子なり。母ハ太皇大后藤原氏。大政太臣贈正一位良房朝臣の女なり。嘉祥三年歳在庚午三月廿五日癸卯。天皇を太政大臣の東の京の一條の第よ生玉ふ。かくて。十一月廿五日戊戌よ皇太子となし玉ふ。誕育九月よあたらせ玉へり。是よりさき童謠あり。大枝乎起天走超天騰躍加理超天我那護毛田仁留邪搜左理食無志岐耶雄々伊志岐那。とぞ謠ひける。識者おもへらく。大枝ハ大兄といふなり。この時文德天皇よ。四皇子とハします。第一ハ惟喬親王。第二ハ惟條親王。第三ハ惟彦親王。皇太子惟仁ハ。これ第四皇子なり。天意かくの如く。こゝに三兄を超く立玉ふ。故三超の謠あり。と見えたり。夫即位ハ國の大事なり。天命その君に歸するよありて。人力のよくする所よあらぜ。去かるを纒頭祿物よ等しく。相撲の勝屓よ任する事あらんや。この正史を見て彼小說と思ふべし。こハ惟喬惟仁の位あらそひといふ事ハ。絶ておしといふ。第一の出證あり。さるを一書よ。淸和のおん事書つらねたる條よ。これたかの侍子の。東宮あらそひし玉へりけんも。この事とこそおぼゆれ。と記されしハ。一切心得がたき事々。亦ある物よ。惟喬親王の位爭ひハ。文德天皇の。天安元年。三月三日ありと。たしかよ書記したり。是より八年己前。嘉祥三年の十一月よ。惟仁親王東宮よ立玉ひたるよ。惟喬親王ハ何の故よ。正おきあらそひを去玉ふべき。これらハ絶て論するに足らぜ。又實錄卷の廿六。第十二張貞觀十六年九月廿六日丙午の條よ。無品惟喬親王よ。封百戸と益玉ふ事見えたり。其勅よ。朕が庶兄惟高親王ハ。先皇の鍾愛玄玉ふ所おり。朕が友于尤相厚からんと欲す。云々。又宣く。骨肉天至。遂よ跡を殊よするをもつて跌とし。緇素道分て。仍欵顏と以恨とす。親王爲邑を讓り還すの日。朕親王の。平昔家途省素をもつて。唯縣官よ仰て。分衞すべきよあらず。おもふに。資齊館よ

足るとも。去かも妨多し。高情ゑ忤らんことを憚りて。いまだ敢處分せず。今果ゑ夫屢空の事を聞くに。悲悵勝ていふべからず。宜彼菅封を全し。この百戸を返してもて。衣鉢の費を助て。朕が惻然の懷を慰べし。制。とみことのり玉ひしと見えたり。かくて同年の冬十月八日癸酉ゑ。惟喬親王。表を上りて。百戸の封を辞し玉ひしかば。亦懇ゑ勅答ありて。許し玉ひざるよし。同書のおなじ卷に見えさり。これらともて。天皇と惟喬親王と。莫逆ゑてと いしませ〜と思ふべし。さると位あらそひなんどいふ。ぬを衣を被せ奉りし。あな心おの。人の口ゑこそありけれ。是より先惟喬親王い。貞觀十四年。秋七月一日巳卯。疾ゑ寢く出家入道去玉ひけり。時に四品。守。小野ゑ閑居去玉ひしかば。小野親王と稱〜奉りき。これ世を憤りて出家去玉ひしゑいわらず。病ゑよつて沙門とおり玉ひしが。性おり閑雅を好み。名利に疎く。よろづ質素ゑといしませし事。古書のうへゑ推量らる。又淸和天皇降誕まして。僅九ケ月が程に。東宮ゑ立玉ひし事い。おん母太政大臣良房の女ゑて。嫡子ゑてといしませば。又惟喬親王い。文德第一の皇子ゑをい〜ませども。皇太子ゑ立られざりしい。おん母正四位下紀朝臣名虎が女ゑて。庶子なれば。又惟喬のおん母い。有常が妹。名を靜子となんいひける。この腹ゑ惟喬親王と。加茂の齊宮或いいふと產〜玉ひぬ。又彼紀名虎朝臣い。仁明天皇の。承和十四年ゑ卒りゑき。それより四年を經て。嘉祥三年ゑ。惟仁親王誕生ましまーたり。けるゑ。惟喬惟仁の王位あらそひの相撲人ゑ。名虎を出されしと作りしい。年代不都合おる物語おらずや。又惟仁親王おん方より。孔雀三郎業平と云。力士と出されしと作りしい。傳奇の作者が滑稽ゑて。白虎朱雀の對をとりたり。文德淸和のおんときゑ。後々の相撲のごとき。綽號したるいなし。これゑ業平の名を負せしい。在原の。中將。の紀有常名虎が子。從四位下周防權守。元慶元年丁酉正月廿二日卒ス。年六十三。と交加て。歌よみかいし君ゑより思ひおらひぬ世の中の人いまれとや戀とよおいふらん。有常かへし「ならいぬ世の人ごとよおもかも戀といいふ玉ふこと。伊勢物語ゑ見ゆめれば。有常の父の名虎と。業平ともて。一番の相撲とし。亦いと後ととひしられしも。玉ひし。武藏國葛飾のほとりゑ。業平或い成平といふ相撲人ありけり。それが住たりけるほとりの橋と。業平橋と唱るといふ。土俗の說に因みて。孔雀白虎朱雀の對業平と名つけたるゑ。この相撲の事こそ。傳奇の作者が筆より出たれ。惟喬親王の東宮あらそひといふ事い。當時の巷說おるべし。江談抄第二ゑ。天安皇帝文德實位と。惟高親王ゑ讓らんとの志あり。太政大臣忠仁公い。抱て天下の政を攝て。第一の臣たり。憚思ふて。口より出ざるの間。漸數月と經たり。云々。或い神祇ゑ祈請し。又秘法ゑ修して。佛力を祈きり。眞濟僧正い。小野親王惟喬の祈師おり。眞雅僧都い。東宮の護持僧たり。己上原本い漢字をもて綴れり。これらの說より。王位あらそひといふよしい出來たる歟。さて眞濟眞雅の兩僧を。名虎業平ゑ去たるゑや。おもふゑ貞觀の勅書ゑ。朕が庶兄惟喬親王い。先皇の鍾愛去玉ふ所なり。と宣いせしを。推量り奉るに。この親王い。おん年も長玉ひて。殊に帝のは愛子にましませしかば。世の人おべて實位ハ。この君におそ讓らせ玉いめ。と思ひ奉りたるに。思ひのほか。惟仁親王誕生まし〜て。僅九ケ月が程に。東宮に立玉ひよければ。人の口のさがなくて。よからぬ浮說もありけんかし。去かりとも。こいみな推量の說おれば。惟喬親王のゆ心より。爭ひ奪んとおぼせし事。露ばかりもおかりしよしい。前に引ところと見てもさらん。さてもゑが主とたのみさりし。氏長ぬしの事い。三代實錄卷の四十九の十五張に見えたり。實錄仁壽二年の條下ゑ。五月廿八日丙午。前周防守從五位下紀朝臣安雄卒。安雄い左京の人。助教從五位下種繼が子ゑ。仁明天皇經術ゑ崇玉ひて。屢儒者とおん前ゑ引して論難せさし玉ひき。時ゑ御船宿禰氏主い。大學博士さり。種繼い助教さり。天皇両人を喚して。經義を論せしめ玉ふに。氏主。禮を執とさて。種繼い傳を舉ぐ。進擊往復しても。折角るゝとなし。この時ゑ當て。膂力之士。左近衞門阿刀

皇胤紹運錄ゑい文德天皇四子ゑして女子おし直子女王を惟條親王の第女二としその下ゑ或い惟高の女と注したりいづきこの是なるや

根繼。右近衛門伴氏長。並ゐ相撲の最手ゐ〜て。天下無雙たり。帝氏主を喚て氏長とし。種繼と根繼と〜て。もてこきゐ戯を玉ひぬ。と見えさり。かゝれバ紀種繼が學問の力を。力士根繼ゐ比へ玉ひ〜。帝のおん戯をおもひよして。紀名虎が相撲の事をいふゐや。抑かのが思ひやるとの。これゐ過さる歟。夫苍談街說といへども。必父母あり。この出處と問ゑして。彼巧拙を批評せんゝ。遺恨の事ゑ。又實錄卷の五十の廿七張。仁和三年。秋七月廿七日戊戌の條ゐ。天皇光孝紫宸殿ゐ御〜て。左右の相撲人の體骨。强弱の形を閲覽〜。その後擇拔て。その名と喚〜く。角觝せさし玉ふと見えさり。こゑ今の相撲取組。喚出〜の濫觴ゑ。この餘夥の式あきど。こゝに與らぬ事なれバいいゑ。いいんとならバ誰にもあれ。代り玉へと。いきまゝバ。衆皆膝の進むと云らゑ。共に笑坪にいりにゐり。

第十一　袈裟御前苦節の袿被

折〜もあゑ透間漏る。裏白窓の夜風とゝもよ。留奇南の熏り馥郁さる。西施が破瓜の春の色も。春ゐあらぬ綉紋樣い。操正〜き雪の松。消ての後い法の水。濯がで潔き袈裟御前が。苦節の像見と名告り〜かバ。寵鼻輝い席を讓るはどゐ。やうやくゐ小膝をそゝめ。ゐらいが主と頼みたる。美人のうへい世の人のよくゑり玉ふ所なれバ。ゐゝゐいんもとふりゐたきど。思ひゐそれ〜人の爲ゐい。又いいざらんも興あらじ。むか〜五人の白拍子むべり。その名を法衣といひ。袈裟といひ。禪師といひ。佛といひ。千手千手い觀音を表せり或い千壽ゐ作るといふ。こいみな救世の菩薩なれども。その傳省畧ゐ〜て。知もの稀なり。法衣といゐらいが主の。袈裟御前の母公ゐ侍り。所縁につきて。ゐかゝり〜とき。奥の衣河ゐ住れバ。衣河殿と唱たるゐ〜。盛衰記に見え侍り。その女兒い渡が妻にて。名とバ東といひゐたれど。世の人母の衣河に因て。袈裟御前と綽號せしゐ〜。亦是おなじ書にい載たり。この母子。舊い白拍子ある故に。さる綽號さへ喚れたり。何をもて。如此云とおらバ。源平盛衰記にも。衣河が夫。誰なるといいぎ。只所縁につきて。陸奥に住たるゐ〜いへるのみ。且ゐかゝり〜とき。顏色も又儔稀なりと。あるを思ひやり玉へ。これを白拍子なり〜といいんも。據あるに侍らずや。さて袈裟御前も。母の跡を繼く。おなじもちなる舞妓ゐり〜に。年才十四のころ。左衛門尉源渡に思いきて。遂に渡が妻となりゑかバ。母の衣河をバ。別莊に養ふにより玉。家隸等い。衣河どのと稱たるなるべ〜。又禪師とい。世ゐいふ磯の禪師にて。靜が母なり。佛どい。加賀國より京のぼりゑたる白拍子にて。平相國に思いれ。後に飽きて尼となりき。千手い平重衡の四きて。鎌倉にといせ〜程。鎌倉殿の仰によりて。參り慰たりしに。重衡終に。誅せられ玉ひぬと聞て。いさく悲み歎き。やがく尼とならまくせ〜に。物おもひの深けれバ。いく程もなくむなーくなりぬ。東鑑。文治四年三月廿五日の條に云。今曉千手前卒去年廿四云云この五人の白拍子い。糸竹をもて世の人の。遊びといなるものから。どの〳〵心操貞くて。見識をさ〳〵男子にも。恥ざると多かり。ゑかいあきど。過世あ〜くて跡も發ゑ。或い尼となりて。生涯行ひそまし。或い身を殺〜て。夫と佛道へ引接す。佛縁ふかきものなれバ。世人ごきに綽號〜て。法衣といひ。袈裟といひ禪師といひ。佛といひ。千手といいひ〜ゑ。又一說に。衣河い磯禪師が姉ゑ。佛と袈裟い。從弟女なり〜といへきど。牽强附會の言なるべ〜。亦かの五人の白拍子に。おの〳〵實名ありぬべけきど。只袈裟御前の名と。東といひしよし。盛衰記ゐ載たる外い。更ゐ考る所侍らず。されバその心烈苦節も。自餘四人ゐいやまして。數百年の今ゐ至りて。この物語を聞くものい。涙を流さゞるいなし。母の爲ゐ身を汚し。夫ゐ代りて死たるい。僅二八の秋なれども。その名の今ゐ滅ざりし。現身と殺して仁をなすもの。命長しとかいひけん。理ゐも稱ひて。いと有がたき少女に侍り。亦彼盛遠入道文覺い。元來渡邊黨ゐて。遠藤左近將監盛光が一男。上西門院の北面の下臈ゐりき。彼

い長谷寺の觀音の厮子なるが。その母左の袖へ。鳶の羽を玉いると夢見て。懐妊して文覺を生みき。父い六十一。母い四十三にて。舉たる一子ことぞ。さるからに。とやく父母を喪ひて。丹波保津の荘の下司。春木二郎入道道善といふものに養を。成長隨に。鎭面牛皮の童にて。心ぞぶとく聲高し。親の教訓をも聽かぜ。他の制止をも用ぜ。道善も持酔たる折。彼が一族に。遠藤三郎籠口の遠光といふの。呼よして。元服さし。父盛光の盛の字と。烏帽子親なる遠光が遠の字と合して。盛遠と名告らせ。父の跡を踏して。上西門院の北面に參らせしかば。遠藤武者盛遠とぞ召れける。武藝い人に勝たりけるが。道心も又ありけん。十七といふ年。不慮の惡行によつて。却て發心し。忽地佛道に入てけり。盛衰記卷十八に盛遠が道心の。緣故と尋れば。源渡が妻の母は、所云衣河い盛遠が伯母と。伯母或い姨に作る。實の伯母にいあるべ。載たるに本づく。渡邊黨の所緣につきて。渡が姑なれば姨といふ歟。一年渡邊の橋供養の日。ゆくりなくも。渡が妻袈裟を眷戀て。思ひ忘れんとすれども。得忘れず。九月十三日の朝まきだに。母の衣河が許によいゆきて。矢庭に刀を引拔つゝ。左手に胸前とりて刺んとする程に。衣河い生たる心持もせず。こいそもいかにと。おそる〳〵その故を問しかば。盛遠答て。袈裟御前をば。夏が妻にせんと思ひたるに。渡に奪ぜ一かば。この三年が程。遺恨やるかたなし。所詮歟と。一所に死んと思ふと。といふに衣河い。刀頭とられてせんそべを去らぜ。せめて命の惜ぜば。まゝまづ放ち玉へ。今宵女兒を呼よして。ともかうも去て。おん心に隨ひ侍るべし。といへば。盛遠い歡に。口を堅めていわしかりなん。と思ひて。渡にかへり忠そな。といきまきつゝ。その夜を契りて歸りにたり。かくて衣河い。俄頃に消息書去さゝめて。袈裟御前を呼よし。盛遠が爲体を。おちもなく聞え去らし。彼が思ひの晴ざらんにい。やいれと放べき。とやく吾御前が手にかけて。母を殺し玉へとて泣にければ。女兒いいさく驚きて。胸くるしきと限なければ。さまざまよこしらへて。母といひ慰めなどそるに。日も既に暮にければ。盛遠い早出來りて。女と共に臥にたり。かくて鷄明曉と告にたれば。袈裟い起別ともそるに。盛遠その袂を引とゝめ。會ぜば逢にありぬべし。會此思ひといかにせん。和御前の不祥い。盛遠が不祥。盛遠ごの不祥い渡が不祥。三ツの不祥が一度に來べき。宿業にこそあるらめ。と思切さる氣色なきば。袈裟い去ばしうち案じて。心ざに偽おくば早く渡を殺し玉へ。ゐらい家に立かへりて。渡に髪を洗いせ。酒を强て。醉臥し侍るべし。櫻に臥さるものゝ。髪を搜く殺し玉へと。信しやかに密語い。盛遠い歡てやがて。夜討の支度をしつ。かくて其夜。渡が家に去のび入り。いひつる櫻にのぼりてかきさぐれば。枕邊に烏帽子をおき。帳臺に臥さるものあり。なほ探りに撈るほどに。濡さた髪を搜りあてゝ。只一刀に。首を切おとして。袖に裹みて竊やかに。舊の所より走出しが。天もあけ家に歸て見れば。渡が首にいあらぜ去て。ゐが殺せしい袈裟にたり。あな無慙やこの女が。夫の命に代りけるよ。ともじめて曉りてふかく慚愧し。郎黨俱して忙しく。渡ごの家へ走りゆけば。門戸を閉く音もせぜ。盛遠來ぎり。と喚門ば。内より答て。面目あき事のいへば。向後人〻にいい。見參しのざしといふ。遠盛聞て。さありとも。女房のおん首を。切たる奴と聞出して。搦捕く參りつる程に。門を開き玉へといふに歎きの中にも嬉しくく。門を開して入れにたり。そのとき遠盛い。首もなき女房の。傍に臥たりたる。渡に對ひて。腰刀を脫くにを遞與し。又袈裟御前ごの首を出しく。ゐごの身の惡事。人さごのへせ一首尾ど。露ばかりも匿さぜ告去らし。まの事あまりに心憂たれば。自害せんと思へども。おなじくい御邊の手にかゝりて。死んとて來つるなり。と云もあへぜ。頸を伸くぞ居たりたる。渡はふたゝび驚きながら。ゐれも刀は持たれい。人の刀にはよるべからぜ。よしや御邊を殺せばとて。死たる妻の活るにもあらぜ。去かるべき善知識にはそあるおらめ。ゐれも御邊も。なき人の爲に世を捨て。來世の苦難と吊んにはとて。刀を

遠藤武者盛遠

著作舘藏版

源左衛門尉渡

著作舘藏版

節操所操守也中禮節也論法云好廉自尅曰節苦節易經節

引抜く。みづから髻を切にければ。盛遠は。渡を七度禮拜して。されも頭髻を切てける。さて袈裟御前が遺書。手匣の中にあり。そのそゑゑ「露深き。淺茅ゞの原に。迷ふ身の。いとゞ暗路ゑ。入るぞのなーき。母ハこれと披き見て。目もくれ。心も消。泣叫ぶと限なし。涙の隙ゑ「闇路にも。共に迷ハで。逢生ゑ。ひとり露にき。身をいかゑせん。やゞて落髮ーて尼となり。天王寺へ參籠して。往生の素懷と遂さー玉へと。祈念そる程に。次の年十月八日に。四十歳にて。めでたく往生を遂にゝり。左衞門尉渡ハ。僧と請じて受戒ーて。渡阿彌陀佛と號ー。失にーー女の屍を。後園に葬りて墓を築き。三年の間ハ。行道念佛ーて斜ならず吊ひけるとぞ。さればにや夢に。墓所の上に蓮花開く。袈裟精靈。その上に坐せりと見さり。その後盛阿彌陀佛ハ。日本國と修行して。求法の志いと苦なり。遂に智者になりにゝれバ。盛阿彌陀佛と改めて。文覺とぞ號しゝる。利根聰明にて。有驗世に勝れさり。知法効驗の時までも。昔の女の事を思ひ出ーて。常ハ衣の袖を絞ゝり。もしや慰むとて。彼女の影を移して。本尊と共に頸に懸て。戀しき時にもこれと見。悲ーきにもこきと甲ゝるぞ。せめてもの事と哀なき。盛衰記卷の十九要と摘のその後高尾神護寺のほとりゑ住ゝり。同書卷の十八ゑ出つさてゑの一條の物がさりハ。當時の小說なり。疑らくハ。盛遠渡が出家の事ゑ。ゝり。衣河袈裟の名ハ作設さる歟。又衣河袈裟の名より。盛遠渡が出家の物語と附倍たる歟。去かれども。既ゑ故事ゑありにゝきバ。こきを有つる事ゑして評せんゑ。渡の妻の貞なる事ハ。實ゑ貞なり。惜かな。死そるとの一ヶ日おくきて。その身を盛遠ゑ汚さきさる事。千載の遺恨ゑ侍り。忠臣ハ死そとも。革命と去らぎ。烈女ハ死そとも其身と汚されぎ。よりてこれと節操といいぎして。苦節といふなり。去かるに後の人。この物語ゑ因みて。烏羽戀塚ハ。渡が妻の古墳なりといへり。是否を去らぎといへども。操塚と呼ぎーて。戀憐戀慕の義ととりて。こきを戀塚と唱る事。

掛云節貞適中過則苦矣豈能富也

治承の頃ゝ文覺狂籍の事あるにより伊豆國へ流され奈古屋寺に

その實ゑ稱ひ侍り。鳥羽ハ山城國紀伊郡ゑあり。伊勢ゑもよ鳥羽田と詠り。同地名有歌「夕立の名殘の雲と風ゑ鳥羽田の早苗末さゑくゝ後京極攝政「雲ゐとぶ鷹のつバさゑ月さえて鳥羽田の里ゑ衣うつゝ後鳥羽院上鳥羽の北ゑ四塚といふ處あり。戀塚もその一ッなりゝんかー。件の戀塚ハ。地藏堂の南。路傍東のかゝある。池の中ゑあり。一書ゑ。戀塚といふもの。二所にありて決しがさー。今この塚ハ。遠藤武者が築く所ゑいあらぎ。いにーへハこの池廣大にして。年ふりゝる鯉あり是。住と久まハゝ。既ゑ神迦と得さり。種々奇怪と なと故ゑ。土人駈捕くこきを滅せり。去かきどもその靈の。祟をなさん事とおそれて。池の底ゑ納めて。墳と築きく。鯉塚といふといへり。ゑれ又信じがさー。唐山の書に。安南龍門の魚の。龍となるよしい見えたれど。既ゑ神通と得たる鯉の。土人に打殺されー。といふ事いまハろ得ぞさー。信鯉塚なりといふとも。おは別ゑ緣故あるべー。さても渡ハ嵯峨の流を汲る源氏さり。去かるに女房の枉死と哀慕し。子孫の後榮を思ハず去て。いとゐかき身の桑門とおりー爲体。殊に女ゝーくも見くるーくて。男子の心さまに似げゑし。うべなるかゑ出家の後。亦聞ゆるとなかりき。又盛遠ハ。渡に頭を繼れく。佛臣となり。功德あるゑ似たれども。在俗の俠氣終ゑうせず。そじめい賴朝卿を激して。義兵と發さー。中ごろハ平維盛の嫡子六代の命乞ーく。是を弟子と稱し。妙覺と號くめて。その身も再び流されにき。大約この俠僧ハ。弱きを助け。強きを拉ぐことを好り。そじめ平家の惡政と憎みく。賴朝卿を激し。既ゑその事成りく。平家滅亡去たれば。さく止ぬべきゑ。又六代ゑすゝめく。世と覆さんと謀りし事。半表半裏。さえく出家人の行狀ゑ似ず。俗人といふとも。いと罪ふかき所爲ゑあらずや。又袈裟御前の畫像を。本尊佛とゝもに頸ゑかゝく。諸國を修行ー。戀ーきときいまれを見。悲ーき時にいまれを弔ひしと。盛衰記ゑ去るす所實言あらば。煩惱を脫離去く。淸果を得さる法師ゑいあらず。西行上人。高尾なる。神護國祚眞言寺へ詣ると聞えーあろ。

籠居せりよりてまゝにふたゝび流されにきといへり

文覺上人徒弟を呼集合。見れ豫く。西行の名をきくといへども。彼ハ弓矢の家より出く。却て和歌ヨ紛らかし。虛名と高する賣僧なり。這奴もしまゝに來バ。一拳にうち殺すべーとく。その准備を去たりゐるに。文覺西行と面あわするヨ及く。その出塵の高きに感伏し。忽地怨猜の思ひを轉しく。却まれと稱讃する事。むじめの惡言にましたりとあん。その成道正覺をなすヨ至てハ。彼も一時。是も一時なるべけれど。世ヨ只。その仁俠をのみ稱せられて。德行ハ聞えず。文覺の生るゝとき。その母鳶の羽の。袂ヨ入ると夢見て。孕りといふ說も。認ごさし。去のハ和れど。後の世ヨハ。かゝる出家人も有ごさかるべし。高尾ハ文覺ヨ名高く。文覺ハ高尾ヨ名高し。もしこの法師をしてそのむじめ。渡ごの爲ヨ擊しなバ。何をもてか。强姦密夫の惡名と雪むべき。もし袈裟御前をしく。盛遠ヨ殺させぎハ。何をもつてか。淫婦失節の汚名を雪むべき。生延く道を得さるものハ。文覺よーて。死ーて名をなせしものハ。袈裟御前なり。命を惜むを可とせん歟。將身を殺そを可とせん歟。このところ曉ごさく侍り。教玉へ。といひかけて。彼是を見かへれども。衆皆是非を定かねて。只管歎息去たりゐる

第十二　九尾の狐の裘

されば苦節の袿被ごの。戀と無常の物ごたりヨ。席上更ヨ肅然に。おの〳〵耳を側つゝ。いとも愛たき色衣と。圓坐する夜ハ綾錦。たゝまくをしう思ふ折柄。忽地出來る五衣。蘭奢の薰り微妙くて。見るに見さめぬ袿被ハ。さや二の町にありぬべー。されやいづれの后町ぞ。と問んにも恐ーければ。みおうち覩りてゐたりゐる。當下件の五衣ハ。上坐に推坐り。されハ玉藻ごの物ごたりにて。世俗ヨ去られたる。金毛玉面九尾の狐の。裘ヨおそ。といへば。衆皆ふたゝびと見かう見て。おいまゝゐも得ぬとを聞かお。おん身ハ官女の常ヨ被るゝ。五衣といふものおらんヨ。裘と名告玉ふハ。いかおる故そ。と問せもあへず。去か疑るゝハ理りヨ。ふるき世の小說。ヨ近衞院の女官と化。玉藻前と呼たる九尾の狐といふものハ。原來おの土ヨおきものおり。故ヨおの五衣を。彼ごの裘と名づけーハ。その小說の本を去る。質ぬーごの好事おらん。去のれども。彼玉藻傳といふものハ。今樣の草紙ヨおらず。いとふるくよりいふとにて。下學集卷の中。張第三犬追物の注ヨ云。昔西域ヨ班足王あり。その夫人惡虐人ヨ過たり。王ヨ勸て。千人の首を取しむ。その後支那國ヨ出生して。周の幽王の后とおり。その名を褒姒といふ。國を滅し。人を惑し。死して後日本ヨ出生す。近衞院の御宇ヨ。王藻前と號す。人を傷ること。極なし。後ヨ化して白狐となりて。人を害すること惟多し。時俗これを驅らんと欲。先走犬を追ふてもて。その射騎を試せり。白狐ハこれを知りて。化して石となる。飛禽走獸。その殺氣ヨ當るもの。立どころヨ斃れぎといふことなし。故ヨこれを殺生石といふ。今ヨ下野の那須野原ヨあり。犬追物ハ茲ヨ始る。但これを古老の口號に聽り。本說を知らぎといへども。且くこれを載るのみ。原本ハ漢文なり今といへり。この書ハ。文安元年甲子六月下旬。東麓破衲序す。と便編者の自序あり。後花園帝の御宇。將軍義政公。幼少の時ヨ當れり。こゝヨ古老の口號ヨ聽とあれバ。この小說の。由來久しきこと。推て去るべし。事のこゝろを推量るに。七十四代の帝。鳥羽院の。美福門院を寵させ玉ふのおまり。內外の事。みな後宮の進退よりよせ玉ひーかバ。世の譏も多く。人の恨も深くーて。終ヨ保元の擂亂となりぬ。これらの事といいんとて。近衞院の宮嬪。玉藻前といふ妖怪を作り設ーハ。かるヨ。鳥羽院のおん時といいぎーて。近衞院の久壽の比ヨせしい。いかおる故そといふヨ。こきも又本づく所あり。保元物語卷のヨ。保延五年五月十八日。美福門院の名ハ得子贈左大臣藤原長實の女御腹に。皇子近衞帝誕生あり。ーかバ。上皇鳥羽帝殊ヨ悅び思召て。何ーか春宮ヨ立王ふ。永治元年十二月七日。三歲ヨて御即位あり。依く先帝崇德

をバ。新院とぞヤなる。云々。去かるよ久壽二年夏のころより。近衛院御惱をいしまゝが。七月下旬よいとや憑小きゐ事よて。清涼殿の庇の間よ迂し奉る。終に七月廿三日よ隱れさせ玉ふ。ほ年十七。近衛院これなり。新院いこの時を得く。ヨが身こそ位よ復つかぞとも。重仁親王い。一定今度ハ。位よ即せ玉いんとを。待受させをいしませり。天下の諸人も。みおかく存ゞる處よ。思の外よ。美福門院のほ計ひよて。後白河院諱い雅仁その時い四の宮とて。うち籠られてをいしゞるを。御位に即奉りしかバ。高きも賤きも。思ひの外の事に思ひゞり。この四の宮も。故待賢門院。璋子權藤原公の御腹にて。新院と御一腹なれバ。女院福のおん爲よい共よゐ繼おれども。美福門院のゐ心にい。重仁新王の寶の女の御腹にて。新院と御一腹なれバ。女院福のおん爲よい共よゐ繼おれども。美福門院のゐ心にい。重仁新王の位に即せ玉いんとを。猜奉らせ王ふて。この宮を女院もてなし進らせ玉ひて。法皇鳥羽よも。内々ヤさせ玉ひゞる之。其故い。近衛院の世をとやくせさせ玉ふ事い。新院呪詛ー奉り玉ふとおん。思しめしゞる。これよりて。新院のほ恨。一しほ增らせ玉ふも理之。摘むなどあるを思ふべし。近衛院い。美福門院のほ腹よて。世を御セ事十四年。おん年僅よ十七歳。物の怪よりてや。俄比よ崩を玉ひぬ。源三位頼政卿。勅命を禀て。夜な〳〵南殿のうへよ來て鳴ゞる妖怪を。射ておとせしといふも。この帝のおん時之平家物語よ仁と聞えされバ。序よきまゝよ。九尾の老狐が。玉藻前といふ女官よ化て。帝を惱し奉りしに。陰陽頭加茂保憲とぞ平の比云々あらいされて。下野國那須野へ飛去ゞるを。三浦介義明。上總介廣常よ仰て。狩らせ玉ふ程よ。狐い脫かさくて。遂よ化ーて石よなりつ。その後源翁和尙。下野よ赴きて。狐の化したる殺生石を。鎭めたりと云之。唐山にも。黃石望夫石なんど。あやしき化石の事と。いとふるきよりの例あり。かゝをバ件の殺生石も。砒石。礜石の類なる毒石よて。鬼魅こをによるとありしかバ。源翁の鎭たりゞる

俗說よ狐の化るときい藻をかつぐといひ又酉陽雜俎よい髑髏をいさだき北斗を拜そるよしこれよ因みて玉藻と名づけ又人の生血を飡ふとい作きり

を。古今未生の玉藻前が事よ附會せーよや。つや〳〵こゝろ得らをぬ事之。そいとまれかくもあを。この一條の物かたりい。美福門院のうへよ比與して。作設たるよなん。されバ當初。三國の怪を并いふとき。周の褒姒よ去たりゞるが。唐山演義の書に。殷の紂王の寵妾蘇妲巳い。九尾の狐の化たるよし作れると見て。後よいおゝよも。褒姒を妲巳とー。白狐よ九尾の二字を被て。これを三國傳來の惡狐といふなり。夫殷の紂王の時より。我朝近衛帝のおん時よ至て。抑幾千載ぞや。和漢の年代あまりに懸隔ーて。不都合なる小說とやいふべき。さて唐山の書籍とも涉獵て證をるに。九尾の狐い瑞獸なり。いかで野狐よひとしく。人を殘害をるものならんや。このとヨりい。燕石雜志よ載たをど。それにい原本のまゝ引用ひたれバ。漢文多かり。さてい婦幼の爲よ。聞えがさき所もあるべー。よりてふたゝび。解やいらげてまゝよいいん。必しもおなじそぢなるを。重出せしとお思ひ玉ひぞ。呂氏春秋よ。禹い夏の禹王三十よーて。いまだ娶らを。塗山よ行り。或い時の暮て。嗣を失んとを恐る。辞していへらく。ヨが娶るよ必應あらん。乃白狐の九尾なるありて。禹のほとりよ至をり。禹の曰。白きいヨが服なり。九尾いその證之。こゝよおいて塗山の人。歌ていへらく。綏々たる白狐。九尾龐々さり。家室に成て。我都悠昌ならん。是よ於て塗山氏の女を娶る。又白虎通よ。狐よ九尾あるい何ぞ。狐死ーて丘を首とぞ。本を忘れざるゝ。安くして危を忘ざるを明せり。必九尾あるものい何ぞ。九妃その所を得れバ。子孫繁息あり。尾よおゐて何ぞ。後當盛なるべきを明そなり。又郭璞贊よ。青丘の奇獸九尾の狐。道あるときい翔見る。出れバ則書を銜み。瑞を周文よ作しても。靈角を標せり。又王褒ゞの四子講德論よ。文王九尾の狐よ應じて。東夷歸し。周武王白魚を獲て。諸侯同辭ぞ。この兩條い。潛確居類書よ載たり。又山海經よ。青丘の山よ獸あり。その狀狐の加くよして九ッの尾あり。その音嬰兒のとー。よく人を食ふ。これを食へい

九尾妖物がいくしりくはよれて行れ又頃は筆削して繪本しふだいせいとよて予本の繪を見るはいかしいのかしのいもがしふからぞ

蠱を毒。注ニ。その肉を嚙へい。人をして妖邪の氣ニ逢ざらしむ。或いいふ。蠱とい蠱毒なり。巻の一又同書ニ。青丘ニ出ッ

の國注ニ東海ニ狐の九尾あるあり。太平あれバ。則出く瑞をなせり。巻ノ十四これら多く九尾の狐の吉瑞と寒た

り。但山海經の一説ニ。青丘山の狐。よく人を食ふ。これを食へバ蠱されぢ。とあるニ因て。和漢の小説ニ。九尾の狐

の人を害そるよしを作出せー歟。玄かれども彼人を食ふといふものい。眞の狐ニいわらぢ。その狀狐の如くニして

九尾なりといへり。又俗説ニ。狐の肉を喫ふものい。彼ニ魅ぢまとて。寒中の餌藥ニとる事あり。山海經ニ所云。九尾

の狐を悞傳さる歟。かゝぢバ九尾の狐い。憎べきものニわらぢ。古人の説ところ。麒麟。芻虞。天錄ニひとしき瑞獸

なり。且白虎通ニ。九尾の狐い。九妃その所を得く。子孫繁昌ニ應ぢといへるニ。こゝニい九尾の狐ご宮嬪ニ化く。三

國ニ妖孽し。國を滅し人を害そるよしをいへり。その善惡吉凶の反覆を見く。虛實をバおのづからぢるべし。和漢の

人情異なるとなく。只奇を好み不祥を唱るのみ。彼九尾の狐の瑞獸あるを ぢらぢ。孔聖獲麟の歎。差夫久しいかな。

又狐ニ首九ッ。尾九ッあるあり。山海經ニ。鳧麗の山ニ獸あり。その狀狐の如くニして。九尾九首。虎の爪あり。名づ

けて嬰姪といふ。その音嬰兒の如ぢ。こゝぢ人を食ふ巻ノ四これらみな。名ありていまだその實を ぢらざる奇獸なり。

されバ九尾の狐といふもの。こゝへ渡りしとなし。あらバ物ニもぢるすべし。但九足の馬い所見あり。九尾の狐い管

見なし。東鑑。建久四年七月廿四日。横山權守時廣。一疋の異馬を引り。將軍頼朝これを覽玉ふニ。その足九ッあり。

前足い五これ所領淡路國國分寺の邊ニ出來の由。去五月の比告あるニ依て。乍怪これを召奇の旨言上ぢ。左近將監

ッ後四ッ是

家景ニ仰く。陸奥國外濱ニ放遣さるべし。云云。同五年六月十日の條下ニ云。横山權守時廣ご獻ぢる所の馬奥州へ流

遣さる。件の男。皇后大進爲宗ご家ニ併途中ニ煩ありて。是を射殺しぢる。綜則顯露て。身い早遂電せり。主人ニ仰く。

尋下さるゝの處。近曾適これを召進ぢ。と見えたり。これらい世話ニ云生そまなひニして。過體厄弱不具の類なり。

これを奇として損なしといふとも。觀て亦何の益かあらん。亦彼玉藻傳といふものゝ。小説なるよーい。人みなぢれ

り。只この小説ニ。父母あるとを考ず。九尾の狐い。瑞獸なるよしをぢらざるものゝ爲ニ。かく驚し侍ニこそ。といふ

折から。遠寺の鐘聲幽ニ聞えて。八聲の鷄も乱ぢ啼バ。見臺先生耳を側。秋の夜のいと長きも。今いとや明るニ近し。

止なん〳〵。と推禁れバ。裘ご の後ニ詰かけさる。天狗の爪取剪。鎌倉時代の上下。米糞上人の乞食袋等い。いとほゐ

なげニ先生ニ對ひ。吾們い。させるものニあらずといへども。又思ふ事なきニーもいいぢ。なほ明るニい程あるべき

ニ。とりのこされんい遺憾し。ともろともニ呟バ。見臺先生聞もわへぢ。その恨いとりなれども。かゝる圓居をお

もひ作ぢ事。今宵ニのみ限るべからぢ。既ニこの席ニ列るもの。久米仙人ご墮落の艶簡。行平の紀念の烏帽子狩衣。

輕大臣ご燈臺。花山院の禪衣。佐野源左衛門ご斷離腹卷。この餘の鶯。毛擧るニ遑あらぢ。縱名もなき古衣なりとも。

思ふとあらんニい。文吾ご袴も。義太ご股引も。俄鰥夫の腰巾着も。轉ぬ前の杖囊も。漏そべうい思いぬど。夜も明て

いそのかひなぢ。只翌の夜を俟玉へ。といと叮嚀ニ説示せバ。みな有理と。荅ふる聲と。もろともニ。夥の燈燭忽地

ニ。一度ニ滅く寂寞たり。寶樹い奇異の思ひをなしつ。又翌の夜と契りし事。ゐれもさすごニ憑るれバ。潛ニ土庫の

内より出く。奮のとくニ銷しつゝ。玄ばー臥房ニ入ニたり。

昔語質屋庫下 終

東京市豐島区目白町拾壱番地 坪内雄蔵

曲亭翁性耽著作嘗讀有用之書以筆子無用之書其讀有用之書也若無用焉其爲無用之書也若有用焉莊子曰知無用而始可與言用矣善哉言也翁善遊有無則其書作意何淺之有是故事取凡近而理較著閱則亦可以慰閑寂降睡魔況若是編博舉和漢故事以辨俗說虛錯却呈之兒戲不自誇其論之高也或批之曰俗說辨下出干諺草上予謂不然也設夫比之蟠龍辨則難以爲兄難以爲弟但其詞荒唐而以失實者有之故雖云未免君子嗤笑其所發明亦足以醒蒙昧矣且仰述千載之前俯辨雅俗之殊似一目一耳所親聞覩之非一朝一夕著述者是故言成燈下之戲墨意有前史之所病豈不以其所戲謔者小所論辨者大乎後世輕才諷說之徒皆驚而其知不相及焉昔者千令升撰集古今神祇人物變化名曰搜神記劉惔稱之爲鬼之董狐今吾有取于是書亦復稱翁爲小說之董狐請海內好事者徒尤其文鄙陋勿與世冗籍同日而論

文化七年庚午肇秋下澣

江湖陳人魁蕾撰

明治十六年八月四日翻刻御屆
仝　仝十五日出版發賣

原板人　東京府平民　河內屋太助
翻刻人　八卷文次郎　京橋區南鞘町廿二番地

印刷發賣所

東京京橋區南鞘町廿二番地　著作館
神奈川縣下濱濱區吉田町一丁目　支局

各府縣賣捌所

但賛成員加名ノ順ニ隨ヒ列記ス

東京書林賛成員

芝區櫻田町　春陽堂
同愛宕町　宮川
日本橋區蛎殼町　信文堂
同　通三丁目　石島
同　通壹丁目　鈴木金次郎
麹町五丁目　篠崎
芝區三島町　日下土地藏
同櫻川町　山口米吉
日本橋區室町　滑稽堂
同　石町二丁目　小宮山昇平
同　兩國吉川町　松木平吉
同　通二丁目　丸屋龜次郎
芝區神明町　寶文堂
牛込肴町　深野彌兵衛
京橋區銀座　山口福松
四ッ谷傳馬町　吉澤爲五郎
麻布六本木町　北原
牛込神樂坂　積善舍
京橋區出雲町　井雲甚七
日本橋區新よし町　山本艮助
同　八形町通り　平野周平
同　福田熊次郎
四ッ谷傳馬町　近江屋定吉

以下次冊ヨ順次揭出可仕候

各府縣書林賛成員

陸前仙臺大町　木村文助
尾張名古屋本町　石版舍
箱館地藏町　田中兵太郎
仝　末廣町　魁文社
駿河靜岡江川町　杉本平七
常陸水戸茨城新聞出店　齊藤利平
常陸竜ヶ崎　岡野昌次
近江土山　共成社
攝津茨木　吉田常三郎
三河豊橋　錚々舍
越中高岡　國本吉右工門
越後長岡　大橋新太郎
羽後横手　下田彌兵衛
磐城平　富田屋伊右工門
上野大戸　文花堂
下總安食　桑原勘介
上總松尾　高林銀藏